

郎路生麻・幹主

# 川柳雜誌

大正十三年三月三日第三種郵便物認可  
大正十三年十二月一日發行 每月一回一日發行

川柳雜誌 第三卷拾壹月號



せり

川柳雜誌社發行

「週刊朝日」  
懸賞募集

川柳「光」

(選者) 麻生路郎氏

◇一人一句官製ハガキ使用の事  
◇大阪朝日新聞社内週刊朝日懸賞文藝係宛

入賞 第一席 (賞金參拾圓)

第二席 (同貳拾圓) 第三席 (同拾圓)  
佳作數十名 (薄謝)

締切 十一月五日限り

發表 週刊朝日新年特別號誌上

(其他詳細は十月十日號の週刊朝日に記載しております)

◆本社十一月例会

◇日時 六日午後七時より

◇場所 大阪市南區清水町停留場西入

兼題 「貯金」三句 端の坊

◇會費 二拾錢

初心者の來會を歓迎す

◆遅日莊柳談會

◇日時 十四日午後一時より十時迄

◇場所 阪神沿線鳴尾 麻生路郎方

◇批評吟 雜吟持參のいせ

◇會費 不要

川柳雜誌 第二卷第拾壹號目次

感想・評論

星は輝けり 黒木 莢 豆

柳風南北 安川久流美

川柳は貧乏人の歌 三好 革 郎

亡くなつた伊東夜叉郎 駒井美の 作

研究・其他

疊み句 麻生路郎

唐柳短解 蛭子省二

誹風柳 權全集の誤謬に就て 西原 柳 雨

柳談會雜記 喜田 飯 山

柳雨「誤謬に就て」へ 竹馬居主人

新戎橋より 万よし 生

川柳南國の街 麻生路郎

脚

▲募 集 句

割前 淺井 五葉 選

柿 林田 馬行 選

皿 番翁・東洋鬼共選

柳翁忌句會・本社十月例会 二柳子記  
各地柳壇・川柳家の戸籍調へ  
編輯後記・表紙繪 (吉田清)

創 作

川柳塔 塚崎 松 郎

同 黒木 莢 豆

同 喜田 飯 山

同 井上 刀 三

同 林田 馬 行

同 生 万 よし

同 横田 眠 聲

同 太田 朝 陽

同 酒井 駒 人

同 岩崎 柳 路

同 三好 革 郎

同 橋本 二 柳 子

同 森 東 魚

同 蛭子 省 二

同 安川 久 流 美

同 柴谷 柴 舟

同 近作 柳 樽



# 疊み句

句作上の常套語法 (四)

麻生路郎

拙句、

炭<sup>ま</sup>ついで 炭<sup>ま</sup>ついで 女<sup>な</sup>をうらむ

これ以上には瘦<sup>や</sup>られぬ 瘦<sup>や</sup>せられぬ

のやうな句をさして私<sup>わ</sup>は疊<sup>た</sup>み句<sup>く</sup>と呼<sup>よ</sup>んでゐる。

「炭<sup>ま</sup>ついで」の句は五五七調子の句で、上五<sup>かみ</sup>中五<sup>な</sup>において同じ句が繰<sup>く</sup>り返<sup>か</sup>えられて私のいふ所謂<sup>せうご</sup>疊<sup>た</sup>み句<sup>く</sup>をなしてゐるのである。これは必ずしも上五<sup>かみ</sup>、中五<sup>な</sup>でなくてもいいので、

「瘦<sup>や</sup>られぬ」の句のやうに、中五<sup>な</sup>下五<sup>しも</sup>において繰<sup>く</sup>り返<sup>か</sup>えられてもいい。更に又「形<sup>かたち</sup>見<sup>み</sup>わけ眼<sup>まなこ</sup>をそらすまいそらすまい」(文久)のやうに中七<sup>な</sup>中<sup>ちゆう</sup>の五文字<sup>ごもじ</sup>が下五<sup>しも</sup>で繰<sup>く</sup>り返<sup>か</sup>えられるやうな場合<sup>ばいあひ</sup>をも含<sup>ふ</sup>んでゐるのである。そして繰<sup>く</sup>り返<sup>か</sup>えられるべき文字<sup>もじ</sup>は敢<sup>あ</sup>て五文字<sup>ごもじ</sup>に限<sup>か</sup>らず、それ以上の字數<sup>じすう</sup>であつても大體<sup>おほたい</sup>において上<sup>かみ</sup>中<sup>ちゆう</sup>、中<sup>ちゆう</sup>下<sup>しも</sup>において同じ句が繰<sup>く</sup>り返<sup>か</sup>えられれば、それを疊<sup>た</sup>み句<sup>く</sup>と呼<sup>よ</sup>ぶのに毫<sup>ちゆう</sup>も差支<sup>さし</sup>はないのである。

律義<sup>りつぎ</sup>者<sup>もの</sup>まじりく〜子<sup>こ</sup>が出來<sup>き</sup>る (古句)

の如<sup>ごと</sup>きは同じ語<sup>ことば</sup>が繰<sup>く</sup>り返<sup>か</sup>えされるが、中七<sup>な</sup>の齣<sup>う</sup>の中で繰<sup>く</sup>り返<sup>か</sup>えられるのであるから私のいふ疊<sup>た</sup>み句<sup>く</sup>はならない。右<sup>みぎ</sup>に擧<sup>あ</sup>げた「まじりく〜」の如<sup>ごと</sup>きは重語<sup>じゆうご</sup>である。重語<sup>じゆうご</sup>を含<sup>ふ</sup>んだ句<sup>く</sup>に就<sup>つ</sup>いては更に詳説<sup>じゆうせつ</sup>する時<sup>とき</sup>があらうと思<sup>おも</sup>ふが、重語<sup>じゆうご</sup>を含<sup>ふ</sup>んだ句<sup>く</sup>を一目瞭然<sup>いちもくりょうぜん</sup>たらしめるいゝ例句<sup>れいご</sup>が拙

句の中にあるから次に示さう。

ビールビール 秋が来たきて 秋が来たきて

これは私が初秋のころ『萬よし』で醉筆を揮つた時の句で『ビールビール』は重語であるから、重語の句の例に入れることも出来やうが、『秋が来たきて秋が来たきて』について云へば疊み句としての例句である。私は斯うして重語の句と疊み句を明らかに區別してゐるのである。なぜ私が、斯んなことを七くざく書くかといへば、從來何人もこゝに言及してゐないと思ふからで、『現に變態知識』(第九號一〇頁)なごでは、重語の中に、疊み句を混入させてある。これは必ずしも間違ひだとは言へぬかも知れぬが、疊み句は疊み句で川柳構成上の一形式として立派に獨立させるべきものだと思ふ。以上で疊み句の正體が判然とした譯であるから次に疊み句の特徴と、その缺點について少しく知つて置かねばならない。徒らに疊み句を眞似て見たからきて、必ずしも名句が生れる譯のものではないからである。

疊み句の例は古句にも現代句にも、甚だ稀である。稀ではあるが巧に之れを用ひれば、たしかに川柳構成の一手法たるを失はないと思ふ。この手法の強味とするところは、句意を一層強める點にある。したがつて線を太くもすれば内容に複雑味を加へる使命さへも帯びてゐる。が一度誤用すればすこぶる嫌味

な句風を生じ易いから、その點には注意しなければならぬ。漫然と疊み句の形式をこつて、なまじつかの句になるよりは、寧ろ繰返すだけに要する字數を他の目的に使用して一句を生かさなければならぬことは勿論である。初心者は次に擧げた例句の個々について更に研究されたい。

### —— 昔の句 ——

去られるのだに 坊もいこ 坊もいこ

(評) 去られるとは離縁される事。三界に家なし、女は去られてゆくのである。それだに無心なごも母の涙を知らず、ごつか面白いところへでも行くものと思つて坊も行くよと云つて聞かないのである。この句一篇の哀史である。「去られるのだに」と切つて「坊もいこ坊もいこ」と繰返へして句意を強からしめた表現の妙、味ふべしである。この句を讀むと「去られながらも片づけて出る」や「にしが出ちや赤がむこいそ里の母」などの句が私の頭をかすめてゆく。

唐人の人込み ハイ虎だ ハイ虎だ

(評) 文政時代の句であるが、この場合虎が、いかにも生きてゐる向ひ風 嫁あはせても あはせても

(評) 今でもよく途上で斯うした情景に接するが、嫁の若さも羞かしさも充分に出てゐると思ふ。裾もあらはな風さへも感じるさすれば寫生句として拙い方ではなからう。

傘ごこか 貴様は貴様は貴様は

(評) 途中で俄雨に逢ひ、知つたところへ駈け込んで傘の無心を





# 唐柳短解

蛭子省二

(四一)孝行の一ばん筆はまゝ子なり  
(四十二)篇箕山)

二十四孝の第一筆、大舜一帝の事である、二十四孝は大舜、漢文帝、曾子、閔損、仲由、董永、劊子、江華、陸績、唐夫人、吳猛、王祥、郭巨、楊香、朱壽昌、庚黔、婁、老萊子、蔡順、黃香、姜詩、王褒、丁蘭、孟宗、黃山谷とされてゐるが、古來此の選び方には論議もあり穩當でない云はれて居る、郭居業の作である。  
『堯舜の牢に蜘蛛の巢附古鳥』堯舜の代には錠前直し來ず』で、堯帝は七十年位にいまし、天下は一人の天下にあらず、太子丹朱に讓り賜はず、賢人を探ねられた際、箕山に許由あるを知り勅使を

立てられしが、許由は富貴を望まず、耳の汚なりを巖川に洗つた、同じ頃の隱士の巢父も許由の耳を洗つた水なれば、牛にも飲ませず渡る事をしなかつた。蒙求に許由箕山に居る唯だ一瓢あり水を酌み樹枝に掛く、風瓢を吹きて鳴らす以て煩さなし樹ちて之れを去る、高士傳に詳しい。『許由も許由巢父も巢父牛も牛』  
『耳たぶへ備はる徳を洗ひすて』  
『耳洗ふ川へはいけぬ黒牡丹』  
『瓢箪をうつちやる胸に何にもなし』  
『許由が川下瓢箪ほつくりこ』  
『許由はすて竹芝は戀しがり』  
等古句は澤山ある

家根ふきも井戸堀もしたみかき様  
井戸堀もしたみ禽王へ御咄

四

そこでお鉢が舜にまはつた、史記の五帝紀に『帝舜有虞氏、姚姓或は曰く、名は重華、瞽瞍の子なり、父後妻に惑ひ、少子象を愛し常に舜を殺さむと欲す、舜孝弟の道を盡し蒸々として又めて姦に格らざらしむ』。太平記に因るに『或時瞽瞍舜を廩の上に登せて屋を貴かせけるに、母下より火を放ちて舜を焼き殺さん、舜始めより推したりしかば、かねて持たる二の唐笠を張りて、其柄に取りつきて飛び下りにけり。…舜に井を掘らせける、是は井已に深くなりたらん時、上より土を下して、舜を生きながら埋めんためなり、堅牢地神も孝行の子を哀れにや思けん、井の底より上げ、る土の中に半は金を交りたりける、瞽瞍弟の象と共に慾心に萬事を忘れければ、土を揚ける度毎に是を争ふ事限りなし、其間に舜傍に悪穴を掘りたりける、井已に深くなりぬる時、喜腹三象と共に土を下し、大石を落して舜を埋めければ、舜

潜にかねて堀りし懸穴より連れ出て、己が家へぞ歸りける」

(四二)戀に木を染め操には竹をそめ (天 保)

戀に木を染は錦木の事であらう「ささあにしては錦木の風流さ」「錦木をたてる頃人も花」「錦木を紅葉にたてるむだなこ」「錦木へ犬の小便出来ぬ戀」錦木は又へついで身を焦し、謡曲「錦木」の中に「戀の染木こも錦木を讀みしなり」さある、操には竹を染めは、堯帝が娥皇女英の二人の崩宮を舜にめやはされた(劉向列女傳に舜既升爲天子、娥皇爲后、女英爲妃)かくて年月を経て帝舜は湘浦にはかなくなり給ふた「その後二人の後、紅の涙を流し給ひて、ふるきを、思せり、ければ鬚の吳竹も御涙にそまりて、斑紋になりけり、君こる涙のいろのふかきには竹もまたらにそむきを聞け、昔の人は思ひそめつる事は淺からぬにや」「唐物語にある。晋子發句撮解云ふ珍本に

寄竹戀 埋られたおのが涙やまだら竹娥皇女英舜崩じ玉ひて、かなしひの涙竹を流るこれ紫竹なりと、まだらは己か毛色の斑なるべし、紫竹日斑竹淚付

(四三)無功德といつて武帝をへこま せる (七十八篇)

西曆五百廿七年頃梁の武帝達磨大師の會見があつた、多分は珍粉漢であつたであらうに、朕は永年佛教を信仰して夥多の寺院も建立し、僧侶も養成した、いつたい之れでそんな功德があるか、達磨大喝一番「無功德」禪問答のマクラは先づこんな所からはいつてゐく、即ち碧巖錄の第一則、從容錄の第二則に續く、梁武帝向ふ、如何是聖諦第一義、磨云、廓然無聖、帝曰、對朕者誰、磨云、不識、これでしまひ、後は面壁九年がオチである、

「俳諧木太刀」の一句

新茶煮て喝破す聖諦第一義

を櫻痴居士が「是聖諦第一義の問答を解

せざるの作家たり」評された言がある此種の記事を用ふる場合は根本義を究めたら自ら濫用は出来なくなる、

(四四)だめをさす頃斧の柄を羽蟻立ち (三十三篇柳雨)

だめは暮の言葉、王質の句、類吟は非常に多い。

鐵の柄が腐れて馬喰町をたちながめせしに老くちる斧さ小野つまらない長壽和漢の釣さ袖鹽やきさ木こり和漢の因果者王質が木をきりに石室山にいつた所石室山に老人連が碁をうつて居たので斧を傍に置いて見てゐた、囊の汁を吸つて饑渴を凌いでゐるが、還るべしと言はれて斧を探つたら朽ちて居た、家に歸れば既に數百年を経て親舊存へる者なし、復た山に入つて道を得たり云ふ

(四五)我朝の湊川にも墮涙の碑

墮涙の碑は晋書の傳に「祐與鄧潤甫、登峴山、垂涕曰自有宇宙、便有此山、因

立碑、後人名隨淚碑」羊祐字は叔子晋の人、嘗て襄陽に守たり遠近を綏懐し其た民の心を得たり、卒するに及び民之がため市を罷め哭聲相接すこ。

近時楠公は活動に劇に新人に喜ばれてる、大阪府河内郡の千早城址には楠公神社が建つさうである

#### (四六) 閉戸先生間違ふ首くくり

係敬字は文寶、常に戸を閉ぢ書を讀む、睡らんこすれば即ち繩を以て頸に繋げ、之を梁上に懸く、嘗て市に入る市人之を見て皆曰く、閉戸先生来るこ」(楚國先賢傳)此奇人を句にした丈けであるが日本にも亦閉戸先生と稱した人があつた、東海門阿波産の宇野三平名は鼎字は土新明霞軒と號し多病と困學、京の諺に三平が出てあるくを見たる人なりと、閉戸先生の名ある所以なり。(假名世説)

#### (四七) 瓦をき直す弟子かへしに

陶侃は晋の鄱陽の人で元帝の時に廣州の

刺史となつた、其の折り朝に百蠻を齋外に運び、暮に百蠻を齋内に運ぶ、即ち現代の勞働の體驗である、曰く吾れ力を中原に延はさむと考ふ、故に勞を學ぶのであるこ、後に王敦蘇峻を平けて功を樹て長沙公となつた、晋書に「陶侃家甚だ貧なり、母湛氏毎に紡績して之に給す、侃をして交を己に勝れたる者に結ばしむ、鄱陽の孝廉許逵來りて侃が家に寓す、適々大に雪降る、湛氏自ら臥す所の新麩を撤し剉して以て其馬に給し又其髮を截ち隣人にうり、肴饌を買ひて以て供す遠聞きて歎じて曰く、此の母に非ずんば此の兒を生む事能はず侃遂に功名を以て高く顯はる」

#### ◆附記◆

(一) 六月號に「藤の花蝟木に上る風情あり」こあるは誤りなり、西山宗因の句「松に藤蝟木にのほるけしきかな」である(但一本にはけしきありこある)

(二) 岡田博士より「(二八) 『三千のうちに腐れた儒者もあり』は(六)かつたるの側で孔子のよまじ言」の次ぎに並ぶべき句こ御注意を賜はる句意はそうであります、孔子家語の弟子三千人を引用せし爲め一寸添わたのですが今後は氣をつけます。

#### (三) 再度博士より御高教を受く(七)

「芹こいふものが出來たまに築の民」活字本に因つたので難句であつたのです、處が廿五篇十八丁ウ「ぜう」(銚)こある由「堯舜の代には銚前直し來ず」の反對銚が面白く解し易し感謝致します。同項に添はりました。

かんぬきは桀紂の代に生まれり  
(拾遺五篇)

くわんぬきはけつ王の代にはしめたり  
(二十篇二〇丁)

類句で桀の民の句の銚を證據立てます。  
一八月二十二日記一





一本氣な女の戀は強かりき  
よい天氣斗りほめてる街の人  
看板をいくつもかけて遊んでる  
新世帯長居無用さ友は去に  
灰色の街かへりゆく交換手  
交換手かみつく聲を受流し  
ほろゑびを女房朝方たしかめる

同 同 同 同 同 同  
同 志 同 同 同  
同 柳 同 同 同  
同 芳 同 同 同  
同 香 子 造 郎 魚

ではをしへて頂戴をんなひひ  
死にたいさいふ若さをばもつてゐる  
親よりも英語を識つただけのもの  
人間へ猿のこゝろで生れて來  
飲む話から切り出しぬ妻のこゝろ  
今一人來ますさ蒲團押へて居

同 同 同 同 同  
同 岡 同 同 同  
同 山 同 同 同  
同 阪 同 同 同  
同 吞 同 同 同  
同 滅 月 珍 一

# 粒々集

## 柳風

スボ (六) 東京 森 東 魚

だんぶくる脱ぐミジャンプはのりが来る  
庭いちりじみてスタート穴を掘り  
馳け通す五千のビリへ手を叩き  
棒飛びは竿賣めくを連れて來る  
取り直すバットは癖さ股で拭き  
本壘打淋しくバツテリー笑ひ  
暴投のピツチ キャッチへ軽く訛ひ  
一壘は死球で來たを撫でてやり  
満塁はピンチが振つてかぶじまひ  
川蒸汽程にクロール水脉をひまひ  
(大正一五・二〇・九稿)

## この頃

朝鮮 蛭子 省 二

頬白にけ朴烈の活字なぎをみす  
卒都婆の垣へコールドタをぬる境内  
晝電燈がつきバケツの花は散り  
貸家みて來て落書の子を叱る  
注射手馴れたる夜の二時に話す

## 十句

金澤 安川 久流美

階下もめし二階も御飯生きて居る  
短冊へ素性の知れた蚯蚓なり  
人間の嘘に入齒も罷り出る  
自由書に蛤書いて罪がなし  
人口が殖わてゐるのに石を賞で  
薄暗い隅にザクリミ米の音  
何思ひけん瀬戸物を割る男  
一日の疲れに下戸の爪楊枝  
あふ爲めに墨を流した空を見る  
珍しい姓ミ名をみるきつ降り

## 雑詠

魚崎 柴谷 柴舟

叱られるさいつた乙女ミ思はれず  
床屋の前は先に走つた乙女にて  
首つてくれこの様な松を植居  
桐きつて燒野の原を想うて居

# 「誹風柳樽全集」の誤謬に就て

西原柳雨

花の山むかしはぎらのすみかなり 一一、一九八、下段  
なごに至つては御念の入つた間違にてごう、ミ云ふ字に濁點まで  
附してある以上はぎらは放蕩息子なごの義に取られたかも知れ  
ぬが、實は見當違の虎にて、上野は昔藤堂高虎の屋敷跡である  
この義である。

花嫁は和ごうの中で茶づけ也

原本が、和ご云ふ字が一才和の字に訓めるのでかく翻刻せられ  
たものご察せらる、が、是は園の中即ち屏風なごで圍ふた中で  
花嫁が茶づつてゐるごの句義であらう。

笑はせに白鬢の禿つゝき出し 十二、二〇七、下段

の白鬢は自鬢の誤り

文せんを妾そばからひつたくり 十二、二二一、下段

かう書くミ文せんは文錢しか取れぬ、原本には文せんごあ  
る、是は即ち文選である、殿様そんなむつかしい書物はおよし  
遊ばせ也。

山もりに盛つたすゞきを二はいくひ 十二、二二三、下段  
すゞきは原本に濁音なし、すゞき恐くばすゞき即ち酢莖ならん  
ご思へご想像に過ぎぬ、酢莖なれば二杯ペロリご平けた人は腹  
の膨れたお内儀であらう。

すんごうのすゞきやんご范蠡はよび 十二、二二四、上段

此すゞきこそすゞきなるべく、すんごうは松江、范蠡が看屋さ  
んごなりて、松江の鱸やんごご、威勢よく觸れあるくごなら  
ん。

本能寺じやうは横手をはたごうち 十二、二二五、下段

原本にも此通だがじやうはの意義不可解、若しせうはではなき  
か紹巴なら愛宕山の附合を思ひ出して、なある程ごほんご横手  
を打つたご解せらるゝ。

下女がさがるでかみ合がたねぬ也 十二、二二二、上段

さがるごすれば下がるの義ごなり意味通せず、原本を見たれば  
さがるごある、さがるごは動物の發情なればかみ合ふの縁語を

結びたる狂句式なるべく、下女が君命を辱しめぬ爲に山の神が  
をさすまらぬ云ふ場合であらう。

くねへひつづいたをじしうもぎはなし 十三、二三二、下段  
じしう不明、恐らくは待従ならんか、さすれば垣間見の師直で  
あらう、くねは垣根のこと。

らん留が能いじやうはへあけちひ 一三、二三三、上段  
この、やうは、矢張り横手をはたき打ちの紹巴がご思はる、左  
すれば「らん留がよい紹巴へ明智いひ」でした方が早く解る  
簡略は原本には假名にてかかりやくごある、儉約の意味なる普  
通は勘略と書いてはあるが、孰れが正しきは知らぬ、ごうるも  
或はごふるか、兎も角も「勘略は融の大匠嫌ひ也」を書けば早  
解りするやうに思はる、即ち例の鹽釜を庭内に築いて手づから  
鹽を製したさいふ途方もない養澤な真似をした河原の左大臣を  
咏んだ句であらう。

丈四尺位につもる夜の雪 一四、二四四、上段  
川柳家は誰も知つてゐる八朝の白無垢を咏める句にて夜では意  
味をなさぬ、原本少し不明であるが、明かに秋である。

ごりの町江戸をくらつたごらが見ゆ 一四、二四七、上段  
又してもごうごあるをごらご訓みそねた上にごらご濁點まで  
も附してあるが、強ひて本字を當てるなら腑ごでもすべきか、  
要するに此句は酉の町の賭場を咏めるものにて、ごらでは何の

ここが薩張り解らぬ。

心中をむさしきうく祈りのけ 一四、二五四、下段  
心中は原本にはしんちうごある、是はしんちゆ即ち新中の積り  
ではないかご思ふ、新中納言の頭を取りたる趣向、尤も第二義  
を罩めた句案ごすれば、少々拙いけれども心中をして死んだ  
土左衛門の幽霊ごでも見るより外はないやうに思はる。

すゞで袖ふるからごほりくせき 一四、二五八、上段  
意義不明、原版磨滅して明亮を缺くも、注視すればすゞはつづ  
の様にご訓める、つづなれば曲りなりにも解はつづ、即ち世ま  
でも娘でおくから例の勞咳に病みつかれたごの義であらう。

八疊に預てばアしかられる 一四、二五八、下段  
ば、アは、明かには、即ち母はの間違である、それでもまだ  
意味が解らぬ、同じく原版不明なれごも、預は願の字のやうに  
もある、若し願つてなら、たつた三疊敷では餘り可愛相だ、ご  
うご八疊の間にして下さいご、息子を入れる座敷牢の相談に女  
が噂を容れて、親父に一喝を喰つた場合であらうご思はる。

をごりごんお近づきにご三會目 一四、二五九、上段  
原本ではおごりごんご訓まれる、夫をはざくワ行のをに變へ  
濁首迄添へてをごりごんご改めたのは、蓋し踊子ごでも解した  
るにやけれごも踊子にをごりごんご云つた用例はまだ一つも見  
當らぬ、ごいつて何の事が自分にも解らぬ、只大駄解を述べ  
ば遺手のごごを反對にお取殿ご云つた趣向ではあるまいか「遺

手は假の名實は貰ひては(文政) 『總名甚だ相違した妻  
 ア(天明)』 『貰ひ手になる時遣手につこ(天明)』 なぎ  
 遣るゝ貰ふを皮肉に言つた句はちらほら見ゆるので、おやりを  
 おごりゝ洒落れて洒落られぬこともないやうに思ふのである。

きながにもならず六部は七里行き 十六、二九〇、上段  
 初五原本にはきながさありてきながは無い、誤植か故意かは  
 知らぬが氣長にては意味をなさぬ、或は半文の意味のきながに  
 ては無きか、歌勢解ではあるが、七里は下總の七里法華の暗示  
 同所は法華宗の凝固まりであるから折角六十六部が巡禮しても  
 半文の報謝をも受けぬとの義かとも思はる。

千兩のごけんあて名はおつるぎの 十六、二九三、上段  
 又しても原本は明かにごけんあるに濁を附してごけんとした  
 のはさういふ積にや、是は活券の假名にて句構は只鶴に千の編  
 語を結んだ文の狂句であらう、一應は植字の誤りかとも思つて  
 見たれど、同じく

目の一つあるがごけんのあて名也 十六、二九五、下段  
 にも判然とごけんあるので、御見か御現かでも解せれるで  
 は無いがさ云ふ疑も生ずるのである、だが是も恐らば活券  
 にて盲人に金を借りて地面でも譲り渡す場合であらうと思はる  
 二タ人づれたさにしなのにはさみ箱 十六、二九三、下段  
 十六編には、さういふものか無暗に濁音の間違があつて非常  
 読み難いのみならず、動もすれば意義迄も誤解に陥り易い、此

句さても同様にて『二人連れたさに信濃に挾箱』もしたら何  
 等の文句なしに直に首肯せらるゝであらう。

文王さふてのたまわく喰ひますか 十六、二九四、上段  
 ふにあたりへひりりに出るかゞみさぎ 十六、二九四、下段  
 此二句なきも必ずしも假名遣を責める譯ではないが、かう書い  
 ては非常に讀みにくく、字を見ずに耳で聞いて判讀すれば或は  
 解るかも知れぬが、頗る無駄骨を折らねばならぬ、寧ろ本字を  
 交へて『文王問うて 曰く喰ひますか』 『夫に當りへび(或は  
 蛇)取りに出る鏡研したら何の事はないではあるまいか、甲  
 は『釣れますかなぎ、文王をそばへ寄り』の類句、乙は加賀騒動  
 の蛇賣一件を利かせた句、研は多く加賀國から出たことは柳

家の一般に知る通りである。  
 嫁の來たばんに見世でも一らしれ 十六、二九六、上段  
 下五一らしれはさうした間違であるか原本によれば正に一人り  
 ぬけの誤植である。

輕くいつても八文がものはあり、十七、三〇四、上段八文は  
 八丈の誤り、故意か有意かは知らぬが八文では全く意味をなさ  
 ぬ、あれ丈の罪を犯した上は重く行けば打首、軽く行つた處で  
 島流しは逃れぬこの意であらう。  
 句作ださ鹽を諸郷へむけてやり、十七、三〇四、下段是も同  
 じく郷は卿の誤り、此句は前にもあつた鹽釜を築いた河原左大  
 臣を詠んだものである。(未完)

# 柳翁忌句會

九月二十三日夜  
於日本橋俱樂部

初代川柳の百三十七回忌を、その祥月命日である二十三日の夜に日本橋俱樂部で營みました。作句後、主幹路郎先生は「川柳漫談」を題して、古くから作句してゐる人にも、初心者のためにも大いに益する點の多いお話がありました。(二柳子)

路郎、松郎、刀三、万よし、ひろし、久郎、藏  
二郎、かほる、塊人、のぼる、開路、山月、閑  
倉、眠聲、結美、實吉、玄水、加香、三笑、靜雲  
川洞、彩秋、南枝、三平、文久、百雷、三斗、琴  
香、一路、飯山、馬行、二柳子

白足袋(兼題) 路郎 選

白足袋へ京の疲れを見せてゐる 玄水  
お百度を踏む白足袋をぬぐ居る のぼる  
白足袋の今日は南で暮れるなり 開路  
白足袋へ開かぬ單筒の音をさせ 一路  
洗濯屋足袋一足の家形なり 川洞  
白足袋を履いて姑しやんご立ち 松郎  
(軸)白足袋の一才遊れいふてき 路郎  
失戀の買ひためてある原稿紙 馬行

失戀 松郎 選

戀に破れて敷島の紙臭し 靜雲  
失戀を母は内氣さ思ふて居 塊人  
寫眞破つて黄金 萬能 結美  
失戀のはづみに出来た夫婦にて 万よし  
打明けぬうちに失戀さはなり 刀三  
失戀に宿の浴衣がこわばつて かほる  
忘れんごする人の足音に似たる ひろし  
失戀へ雨降れよかし降れよかし 路郎  
まだ忘れずにきかきひやかされ 同

枕 文久 選

眼が覺て見れば枕は縦にあり 久郎  
押入の蒲團枕が先に落ち 南枝  
なつかしい枕だされて母に寝る 結美  
子の枕人形の足の慮外なり 松郎

福引に枕が當るはづかしさ  
子が出来て枕の位置が變るなり  
枕から枕へ何か放つてやり  
枕許思ひくゝの人が来る  
座蒲團を四つに折つて妻の留守  
氣樂さは枕をさけて出迎へる  
(佳)宵の口だけの枕が見當らず  
(佳)手枕の恋はさう寝たいだけ  
(佳)土産物留せは枕へ顎をのせ  
(佳)恐ろしい夢は枕を落ちてき

虫 互 選

戀知つて初めて虫を寂しがり 久郎  
虫の音を嬉しがる程村に馴れ 三平  
虫の聲今宵ひさしほ身にしみる 琴香  
世を捨てた氣で虫の音をきいて 彩秋  
一匹の虫振り袖を恋はがらせ 三斗  
姉背の子にせがまれて虫を取り 眠聲  
死んでゐる蟲へ朝から雨が降り 結美  
いなごまだ出樂刺で生きてゐる 龜二郎  
響出工面して居るさは知らず 一のぼる  
一匹の虫に妾の高調子 百雷  
虫賣りに藝者の晝寝起される 閑念  
紅つて蟲にせかれる夜をで 文久  
襖まで右に左に 油虫 南枝  
つまもうごすれば虫も動き出し 二柳子  
釣れぬ日に虫なき挿つて戻り来 万よし

電燈へ虫一匹の音をたて 川洞  
 夜露ほたり其のコホロギを驚かす 静雲  
 蟻一つ米の間へすべり落ち 同  
 逢引へこそほう虫がごまるなり かほろ  
 つまゝれてゐるうち虫は髭を立て 同  
 虫の音へ夫婦は膝の手を揃へ 馬行  
 虫の音を今夜も三味で消してや 同  
 こほろぎの爲の家まじなりにけり 塊人  
 西行へ松虫 鈴虫くつわ虫 同  
 虫なければなくて原稿料になり 刀三

一番に乗る後朝へ蟲がなき 同  
 虫きいた斗りで歌がよめるかい 飯山  
 虫の聲女房を見れば縫ひつゞけ 同  
 虫の鳴くその足元の月明り 一路  
 旅の宿今夜限りの虫をきく 同  
 娘を賣るに忍びず蟲の夜ごなり 松郎  
 蟲の聲嫁の心を淋しうす 同  
 蟲きゝに厭るあるじになりきり 路郎  
 かなもけりも作れず蟲の聲ばかり 同  
 蟲なくを哀れさも見ず妾住む 同

# 本社十月例會

十月三日午後六時  
 於 端 の 坊

松郎、馬行、乾坤、子行、塊人、百雷、放馬、萬  
 よし、突支坊、三笑、加香、志郎、六花坊、碧  
 樓、三斗、琴香、眠聲、オノイ、冷笑、彩秋、佳  
 山、かほろ、南枝、久郎、龜三郎、ひろし、川  
 洞、二柳子(名簿より)  
 米(兼題) 松郎 選

米代を稼ぐだけで追つつかず 久郎  
 節米と言はず麥飯つゞけられ 二柳子  
 米の値を氣に頃に又孕み 三笑  
 生米を嚙んで丁稚の里ごゝろ 川洞  
 きれる氣へ米が言譯程残り 馬行  
 餅米を洗うて暮れる總本家 ひろし  
 (佳)誰食ふごなしに外米輸入 六花坊  
 (佳)米の値も知つて妾の考へる 悟郎

(佳)信心の米は多少にかゝはる 南枝  
 (佳)女房の落した米は跳あがり 馬行  
 (軸)米屋来てばつさりおけ音もよし 松郎

七 馬行 選

借つて来たセルの袴で受付ける ひろし  
 ひんやりごしとセルを着て歩き 志郎  
 てんぶらの香にセルの肌ざはり 三笑  
 セルの袴まだ學生の口調なり 子行  
 逢ひに来た女にセルを値ぶる 同  
 ステツキを縦横に振るセル袴 乾坤  
 一枚のセル裏返し 同  
 セルを着て何處も的のない散歩 放馬  
 野球見に行かごセルの連が来る 同  
 セルを着てロイド眼鏡が似合 同  
 セルの袂に松竹座のプログラム かほろ  
 セルを着て竹の表の下駄を買ひ 同  
 セルを着て一も二もなく飲む話 同  
 今日のをセルに朝日の封を切り 松郎  
 セルを着て秋を肥つた事を知り 同  
 懐しさ頼まれて縫ふセルの柄 同  
 (軸)菊池氣は拙いねと来るセル袴 馬行  
 (同)セル袴で學資を取りに来る 同

紙 幣 互 選

米の値を安うに思ふキログラム 夢遊  
 雀食ふ程は残つた米俵 六花坊

世をのがれたい紙幣は皺がより 志郎  
 竈上に紙幣もまれたまゝに出る 川洞  
 敷島に十圓紙幣大きすぎ 琴香  
 まつさらの紙幣に母親未練あり 百雷  
 結納は百圓紙幣の新らが出る ひろし  
 たゝむには餘と惜とさらの紙幣 佳山  
 几帳面に紙幣を四つにたゝむ癖 突支坊  
 百圓と旦那の顔と見くらべる オーイ  
 其紙幣刺とつさきさいと來 眠聲  
 百圓紙幣持てば持つたで使ひた 久郎  
 先おつり尋ねて煙草買ふ紙幣 六花坊  
 紙幣だけ別け持つてる親旦那 三斗  
 紙幣束の一枚づゝに苦勞が 子行

紙幣出して重たい程の刺りに 碧樓  
 紙幣一枚一家へ春がおこづれる 松郎  
 五圓紙幣今夜で二日持ちこたへ 馬行  
 持ちつけぬ紙幣は財布に幅取り 乾坤  
 紙幣ばかりになつて掛取戻さ來 二柳子  
 刺錢におちぎをしてる五圓紙幣 同  
 百圓紙幣でも落ちてゐるさうな夜 彩秋  
 拾圓を待たせて車掌次を切り 同  
 拾圓を崩してからの二三日 南枝  
 久々の百圓紙幣を子にも見せ 同  
 百圓紙幣自分のものでない様な 塊人  
 女房にきれいな紙幣を皆さられ 同  
 落籍されて百圓紙幣を四つ折り かほる

拾圓をみんな使つて戸を叩き 同  
 入墨(相模吟) 佳山  
 入墨の堅氣になつて無駄なもの 山  
 つゝがなく入墨今日も歸つて來 彩秋  
 入墨はしなび保養院に生き 突支坊  
 恵まれぬまゝに人墨年を取り 南枝  
 湯屋で見る人墨大分弱つてる 百雷  
 入墨へ乳房が重い美しさ 子行  
 入墨が這入るあつい湯がこほれ ひろし  
 落葉踏む入墨故郷振り返り 三斗  
 入墨がひり／＼として孫に負け かほる  
 内風呂をたてゝ入墨世を狭く 志郎  
 入墨をせねばよかつた金を持ち 放馬

## ▲十七字中心主義

こゝに一十餘白が出来たから柳談會で一  
 寸話題になつた「川柳雑誌の會では、破調  
 の句であれば探る」さういふ誤つた考へ方  
 について蒙を啓いておきたいと思ふ。私  
 としては何處までも十七字中心主義であ  
 つて時に十四字詩を探ることもあるが破  
 調のものは決して探らない。その人達の  
 いふ破調とは十七字に足りない字数の句

さういふ意味かも知れぬが、字数が十七字  
 に足らぬさういふこと、破調さういふこと  
 とは自ら問題が違ふ。

私は繰り返していふが十七音字中心主  
 義である。時に例外を認めるさういふに過  
 ぎないが破調の物は決してさらさないさ  
 いふのである。私が十七音字中心主義であ  
 る理由は詩としての川柳にリズムを尊重  
 するからである。短歌の卅一文字、情歌の  
 廿六字、俳句、川柳の十七字これ決して偶  
 然でない。出鱈目ではない。大和民族の

持つ獨特の音律でなければならぬ。表現  
 記號でなければならぬ電報語数の如く勝  
 手に制限し得るものではないのである。

時にこれを破るものが出てくることはあ  
 らうが、それすらも單に例外として見る  
 べきものであらうと思ふ。句會に來て破  
 調云々に惑はされてゐる人達や誌上にお  
 いても若しこの感をいだいてゐる者があ  
 りますれば、さうした外形的の問題に煩  
 はされずに一意専心名句に向つての一路  
 を歩みたいものである。(路郎生)

# 川柳南國の街(下)

## 麻生路 郎

旅に夢もなく、いつの間にもやら明けてるた。

扇ヶ濱ボボボくさ明けてゐる  
ちつと寝てゐるなとで汽笛が鳴る

洗面場から戻るこ、もう左馬、楓林の二君が座にあつた。

「あついな」さいいながら、楓林君は素早く肌襦袢一つになる「年の加減でさても辛棒出来ません。家ではこれさへも附けてゐられませんが」さ肩につけてゐる肌襦袢を引つ張つて見せた。私はその時即興的に  
先づ脱いでそれから話す楓林子  
さいふ句を吐いて三人で笑つた。そこへ素養氏が見わたたので一緒に宿を出た。

途中で左馬、素養二君と午後を約して別れ

楓林君に伴はれて新屋敷の明荷庵を訪れた。庵主の明荷君は喜んで二人を迎へてくれた。

玄關と内玄關とのさりあひに、定紋を染め抜いた暖簾がかかつてゐた。それは私の家の紋と同じだつた。

庭に面した明るい座敷で、夫人や令息にもつた。會夫人は俳句を作つてゐるさうだ。その参考書は麻生路郎編著の「大正傑作壹萬句」だ、聞いた。その作品には接しなかつたが、こんな静かな土地で句に精進してゐられる人達は幸福だと思つた。私は夫人に川柳を説いた従來の川柳は婦人によつては、顔をあらからめればならぬ場合もあらうが、今日の川柳圏はそんなに狭いものでないことを説いておいた。

明荷庵を辭した二人は、更に愚圖六氏を訪れた。山の上の一軒家でも知らぬ果樹が立ちならんで眼界を遙きつてゐた。こゝでは夏の暑さも、そんなに凄まじくはないものではなからう。

「やあ、よくこそ」愚圖六氏は椽の方へ立つて來た。上るやうにすゝめられたが、他に來客もあつたし、會場の方へもいそがれたの

で椽先で話し合つた。令閨や母室にも引合はされた。午後を約して楓林君と私はそこを出た。

田邊の街の眞下に見えた。海が輝いて見えた。二人は青い草を踏んで山を下つた。田邊の町と裏田邊との合ひを、肩をならべて通り抜けた。川柳講演會の會場である江連の龍泉寺へついたのは十二時半ころだつた。

龍泉寺は川柳寺と呼ばれてゐた。住職の藤堂雲内和尚も川柳家の一人であつた。その師も、その先代も川柳が好きだつたさうである。本堂の横には雑俳の納額なごがかゝけられて、それらしい跡を偲ばしめてゐる。

會は蘇鐵の生ひ茂つてゐる庭に面した廣間で開かれることになつた。ほつほつ集まつて來た人達からいろいろな質問を投げられた。それに應答しながら開會を待つた。やがて白髯の紳士福富美琴氏が起つて紹介の勞をこられた。

私は、最初川柳の沿革に就いて少し話した。知つてゐられる方には氣の毒だとは思つたが、辛棒して聞ひて貰うことに

した。

それから何故川柳雑誌社を起したか「川柳雑誌」を出すに至つたかさいふ理由を述べた。次いで吾人の立場についても話しておいた。家庭三川柳についても話した。なほ多くの云ひたいことを残して壇を降りた。それは限られた時間のうちに話さ作句とその批評をしなければならぬからであつた。

私の話しは拙かつたが、相當にうなづいて貰へたことは大變なよろこびであつた。次いで一題を課して作句に移つた。

女 (席題) 麻生路郎選

洗髪 その一筋の美しさ 釋迦也  
浅い瀬を渡る女も姿なり 愛庵  
おりこう云へぎ女は女なり 奇功坊  
美しい女を見てる女の眼 藥袋  
殺されて女の罪は消るるなり いの丸  
戻りや直ぐすだれのうちの女を 排奢  
寐てばかり居て口だけは女立ち 素囊  
酒亂に入らず女が一人居る 美琴  
蚊帳を出る女に無理な姿を見 楓林  
見られたし見られてわるき傘を 山彦  
やんばりさ話して女時を明け 同  
明荷

婦人席 女ばかりの持つ匂ひ 同 木の子

彼の女金を持つてる 面憎さ 同 愚圖六

無駄にする事には女よい度胸 同 愚圖六

魔物ださ女を思ひ當つたり 同 左馬

泣く子には勝てぬ女の弱さなり 同 同

はしやいで女は何か取りに立ち 同 同

もしくさ呼べば女は少し逃げ 同 同

境遇が似て涙ぐむ女なり 同 同

以上を選む三同時に、その一句一句について批評した。没の句についても参考

さなるべき句については批評を試みた。

その出席者は、いの丸、藥袋、釋迦也、美

琴、青磁、素囊、蒼生坊、紳人、木の子、

乙首、愛庵、山彦、信雄、明荷、胴打、

茶利吉、喜久坊、排奢、愚圖六、左馬、

楓林の諸君であつた。薄暮に及んで會を

閉ぢ夜に入つてから錦城館に席を移され

私のために盛大な歓迎會が開かれた。

美酒佳肴は云ふまでもなく川柳家諸子

の隠し藝繰出で特によりぬきの美妓を聘

して田邊節を紹介されるなご至れり盡せ

りの歓迎振り、感謝するに辭がなかつた。

田邊節二燈一線で船がなかつた。

十一時過ぎ歡を盡して散會した。

翌朝は蟻によつて眼をさまされた。扇ヶ濱

の松の樹にある 大きな蟻が私の寢床に遣入

つたのである。女中が驚かないところを見る

さ、あまり珍らしい事でもないらしい。午後

一時の船で、いよく歸へる事になつた。私

は寢ころで濱の荷あびを眺めてゐた。楓林

君、左馬君、木の子君が來訪された。柳蔭社の

寶物の拜觀をすまして、宿の雅帳を汚した。

其他のぞまると、まよと悪筆を染めた。いよいよ

一時に柳友諸子に見送られて、琉球丸に移

つた私が急いで甲板に出た時には、柳友の辭

から麥葉帽を振る姿が小さく小さく見えて

ゐた。

私の紀行文は之で盡きた譯ではないが、

あまり長くなるから、此邊で筆を擱う。

兎にも角にも前後四日間(八月十八、十九

世、廿一日)の川柳行脚は私のためにも川

柳そのものゝためにも有意義であつた。

それは田邊町の川柳家諸氏が川柳が作れ

ないのでなく作らないためにふるはな

かつたのである事を知つたからである。

田邊町に於ける五十餘名の川柳家は町の

あらゆる有力者さ知識階級を網羅してゐ

ることを知つた。私は今後を期待しない

ではゐられない。



# 亡くなつた

## 伊東夜叉郎

駒井美の作

歳は唯か今年廿八か九、足の工合が少々悪かつたが可成でつぶり肥つた軀に、短い髻を蓄へたのが健康時代の夜叉郎の面影である。本名は伊東薫太郎、酒も中々行ける口で有つた。私が故人にはちのちの逢つたのは關西から一旦歸東後、神田の開花樓に坂本猿冠者の脚本朗讀會が催された日で、萬雄君にも其處で顔を合せた記憶してゐる。間もなく雑誌の『花束』が廢刊に成つて同人一同が何さなく物足りない折柄、川村花菱君と一夕の座談から小集を開いたら云ふ事になつて花菱君に諸君を紹介する方々、概に應じて集まつた連中は故人や森東魚、大野空蟬、吉田若蟲、坂下也奈貴の諸氏で、此小集は矢の木曾と名づけられた。矢の木曾は柳の異名で水谷竹紫君が和名訓鈔あたりから調べて贈つて呉れた名で、其後生れた川柳詩社の前身云つても好いもので有る。成川浪々等と呼ぶ人も此小集から生れ、俳優の高山晃君

も同じ様に時々來て頭をひねつて居た。夜叉郎の句は敢て新しきを銜はず奇を逐はず或る確かりしたものを撰つて居た。含蓄が多方面で其短歌の如きは寧ろ川柳より既に早く人に知られて居た。當時日本橋の桔梗書房から舞臺云々演藝雜誌が發刊されてゐたが私が柳壇を引受け同君は専ら歌壇の方に當つてゐた。非常な又能筆で神戸の故青明に其筆蹟が頗る相似てゐた。當地の葭乃女史など故人の句の愛好者の一人で先頃も私に向つて話が出た事も有つた。故人の句集『きぬ柳』は東京の人々の中には所持されて居る人も有ると思ふがそれは同君が確か鬼怒川水電に在職中の記念だと思ひてゐる。

船橋へ唐笠届さく棒が立ち  
 大門を閉めた話は虫が喰ひ  
 京の旅寺から寺へ日が永し

(無線電信局)  
 (吉原)

なぎの句が今思ひ出される。當地方の川柳家で夜叉郎と親しく膝を突き合して句作に耽つたのは私の知つて居る處では神戸の紋太君より他は知らない。丁度紋太君が上京して拙宅へ一泊した日、夜叉郎と成川浪々が來合せて清記巨選で四人作句をした事がある。最初夜叉郎が一位で私が二位、紋太が三位の成績を占めたので負す嫌ひの浪々子は遠來の紋太君に對しても口惜しく翌朝又々戦ひを挑むだが今度は紋太が一位に私は動かず夜叉郎が三位を占めて依然たる有様に何を云つても當時まだ顯出しの浪々子の敵ではなく一人残念がつたのは随分可笑かつた。其時

分私は又よく旅に出掛けた。長い二月三月はまゝ留守になつた。拙宅の大家さんは家主で有るに同時に一面洋書家の友達で有つた。私の不在中人が来て少し難しい話になるに留守番の女中は私代りに直に此大家さんを引張つて来た。家主君も是には度々閉口して小宅の女顯の壁に紅の唐紙へ：「此家老婢一人犬二頭を預り居る假りの住ひに候へば主は飄然西に遊び東に赴く者」候御遠路御光來の砌り御用の御方は右用紙へ御用趣の程御認め置き下され度候大家にして親友なる小倉憲太郎敬白に達筆に書いて傍らに鉛筆で手帳が吊るされた。小倉氏に云ふのは帝展彫刻家の新進小倉武夫君の兄さんである。夜叉郎も或時留守を訪ねた其一人で此小倉君の名文を面白がつて一文を草した後に「霜ぎけの路を逸民踏んで来る」郊外の一句を賦して少しは家に居ろよと書き残して有つたのを折柄旅先から歸つて来た私が讀んで笑ひ出した事がある。故人はのつしりした風姿にかゝわらず中々茶氣滿な處が多かつた。私は句會以外餘り逢わなかつたが或る日同人の面々ミ洲崎に遊びに行つた事がある。丁度紀元節の日で飛乗つた自動車の中には小さな國旗がかざられてゐた。酔つて居る夜叉郎がそれをポケットに押込むで降りた時運轉手が返して呉れさ云つたが遂に掠奪して座敷でそれを愉快氣に小供の様に盛んにふり廻した。其他同じ顔ぶれでお膝元は窮窟ミ云ふので東京府下の八王寺市に遠征した事が有つたが

此夜の賑かさなごは翌朝誰彼なく一同全く聲がかれて仕舞つた。其他申譯が些かない方では確か東京日々新聞社の講堂が近藤館ん坊氏の主催の川柳句會が有つた事がある。夜叉郎ミ浪々に誘はれて私ミ夜叉郎が句を作つた軽い茶氣滿々な夜叉郎が今日は何作に氣が乗らないから匿名で出さうミ席上で私に云つた私も其時はじめての場所と同じ様な心持がしたので匿名で出した處が幸か不幸か句がちよい／＼ぬけて二人共其度ミに忘れもしない郵便葉書の賞を渡される思ひがけない事に二人共今更席上名乗る譯にも行かず、御氣の毒やら恐縮やら御互に閉口して仕舞つた。おまけに最後の閉會に滿場の中で劍花坊氏が立つて柳壇で相當の作家が匿名でかゝる裏合作句するのは不眞面目不都合で有るミ大聲の演説で大いに叱られた形で有つた。然し是も夜叉郎が別に深い惡氣なきが有るのでは勿論なく例の軽い茶氣滿の祟りで同君の死後の今日紙上で深く井上近藤の御兩氏に私ミして御託して置く處である。私は頃日来眼を患つてゐる處へ暹日莊主人からの依頼に依り亂雑乍ら自分の知つてゐる伊東夜叉郎君を書いた次第でなほ同君の作句等に就いては一層親しかつた森東魚君あたりが何かの機會に筆を執られたら面白いと思ふ。私は秋に亡くなつた故人の秋の歌の一つも書いてこゝにペンをさめる事にする。

秋の風憂へ持つ子が前髪を

強くな吹きそいささかはよし

夜叉郎



# 川柳塔

○ 塚崎松郎

猫のすゞ初戀のよな音をさせ  
風船屋親の心になつて賣り  
一本の葉も途上のなぐさみに  
傘干せば屑屋が通る屑屋が通る

路那氏頃日頓に健康なり(二句)

ロンちやんご湯から戻つて飯の味

病後新淀川に釣りを試む(二句)

物言へば秋の草にも應ある  
まだ何もかゝらず草を踏むばかり

鳥籠の下にまめまめしい夫  
夫婦にて菊に親しむ日もあつて  
薬罐の影の更けて恐ろし  
兄の着古しにあまんじ遊びに出  
疲れては親さいふこさへ忘れ  
工場の笛の音にもながみじか  
渡り鳥のやうな希望にかゞやいて  
そこを突けそこをゑぐれギルヂング  
あきらめた方がいゝのかネエ雀  
冬仕度女房はボテに首を入れ

出は出たが甘粕の身のおきごころ

○ 黒木 莢 豆

秋の蚤祖先この地に居をトし  
弱いものこは病人の努力にて  
阿呆けな涙のほかになんらなし

九月十九日妹清美逝く

妹のしてゐるたごほり掃除をし

○ 喜田 飯 山

長火鉢までおりてくる足音だ  
拭くまきのつくゑひろさを見せてる  
窓からみれば僕の靴直してる  
一斗づゝ買ひますのかま國の母  
考へりや部下も愛さにやならぬなり  
何代もみんな疊の上で死に  
ごの人の世話にならうか爪楊枝  
たそがれを西洋人の大股に  
きいてみりや矢つ張り飲んでるさうな  
ではこれも年のかけんかなごおもひ  
君にまでさうおもはれてゐて淋し  
ボーナスへだんだん近う判を押し

○ 井上 刀 三

捨てられて今度は邪魔をしにかゝり  
ラシヤメンのふき淋しきは赤蜻蛉  
兄妹になつてくれろに困るなり  
雨の日の線路光るを獨身の  
手も足も出せないほごに信じられ

○ 林田 馬 行

童貞かさうか話はそれつきり  
藏の方から黒い影来て質屋死に  
何氣なく覗けば日本銀行なり  
おひらきに見れば中折へしやけて居  
面當てに映畫の方で賣るつもり  
二十五の時に頭を打つたきり  
女好きで御座つたさうな七回忌  
芝居氣の過ぎる夫に飽きがきて  
割に合はねえくゝ三戰死する

○ 庄 万 よし

泣くこごを知らず子を産み金を貯め  
朝鮮の豆腐悪いも世辭のうち  
來いさだけ書いた端書の恐ろしく

顔朝の抜かれたまゝに一つ咲き

○ 横田 眠 聲

大阪の土産ボツペン買うて去に  
カツレツが馬肉であらう逢へばよし  
ある時は馬鹿さいはれて儲けたり  
母さ嫁今日はおからをたくにきめ  
出前持までおちぶれて髭をそり  
金みんなつかひ果して胃がわるし

彼 岸

中日の休み朝顔みんなひき

○ 太田 朝 陽

空想は先づ増給に初まつて  
別荘で見る松の木は動いて居  
犬殺し踏切までは追つてゆき  
下宿屋へ増給のこさいひ添へる  
惚られてゐるに辻占凶さ出る

○ 酒井 駒 人

新の下駄キチンさぬぐも女なり  
弟よたまには母に手紙出せ  
意見する人に馴染が一人あり

婦女界を淋しく見てる丙午  
迷ひ子を取まいてゐる秋の暮  
さう工面したか娘の腕時計

○ 岩崎 柳 路

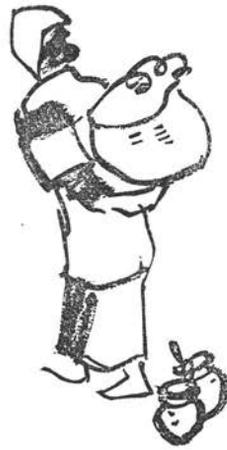
女優もう人氣の落ちたこきを知り  
猿飼うて何んかの足しに成りますか  
令夫人二錢銅貨を汚ながり  
弟の理想株屋に成るさ云ひ  
孕んでるこきを知らずに口説いてる

○ 三好 革 郎

人相を氣にするやうな年になり  
女房にあたれるだけのしあはせさ  
この頃は雑巾のやうになりました  
何も彼もいらぬやうな氣にもなり

○ 橋本 二 柳 子

働いて日本へ歸る父にして  
酒に辨當貰ひうらゝかな日なり  
鐘をつくのか白い衣で椽に立ち  
近所の子等とお父さんを通さない  
夏に來たころは噴水あがつてたに



# 星は輝けり

黒木 莢 豆

詩はいさも安らかな気持ちで作りたいいものですね。ペンの尖から微笑が流れ出るやうなものは嬉しいでせうね。寝ころんでページを繰つてゐるご胸にふんわりとしたものをきせかけてくれるやうなものはうれしうでせうね。たまには願の紐をきき時には快い眠りを誘つてくれるやうなのがごましいですね。詩は刺戟を手段としたものはいけなうでせうね。安眠のあとに力が、亢奮のあとに疲勞がくるやうに思ひます。狂奔のあとへやつてくるものは畢竟デカダンでしかありねないでせうね。繪畫でも第三科藝術なき、稱してゐるものは、この上もなく刺戟の強いものゝやうですね。エノグではものたりなくなつて雜誌の切抜きや、道端の牛のわらんちをくつゝけたりしてゐるやうですね。繪のことはちつとも知らない私ですけれど、あのやうなのはたごへ言へば薬品中毒といつたやうなものがそこにあつて、おしまひにはカンバスの上へ丸ビルでもくつつけなければをさまらないやうになるのでせうね。

詩にはまた理屈つほいものは禁物ですね。考へねば解らぬものも閉口ですね。水の流れに副ふやうにびつたり靈感にふれてくるもの、そんなのが一等のごましいですね。不潔な情緒をそくするもの、刺戟を求めさゝれるものは好もしくありませんね。詩人の心はさうしたものを超越して高く澄んでゐたいものです。それらのうちに昏迷し沈吟してゐる句には安心がありませんね。救ひがありませんね。よき詩に接する心が次第に安らかになつてきますね。洗はれてきますね。心に曉が訪れますね。古來大詩人云はれた人の詩はをしなべて澄んでゐるやうですね。そこには人を亡ぼす詩はなく、人を永遠に生かす詩があるばかりでした。

此頃の詩壇は可成り混沌としてほそくしがたいものがあるやうですね。ダヴィズム、デカダン、錯覚といつたものがかなり入りこんで行つてゐるやうですね。私はごこまでも平和な心境に基礎を置いた、直覺的なものがごましいと思つてゐます。愛

のあるもの、微笑のあるもの、魂のさゝやきのきこゆるもの、自然の心に副つて澄んだもの、それらのみながのぞましいですね。

あまり技巧の勝つた詩は迷惑ですね。それは多く廻り道をしてるますね。詩人にトリックは大禁物ですね。心境の澄んでゐない人にほんたうの詩はできませんね。所謂才人や學者が、いかに多くの美辭麗句を知り、如何に人情の機微を洞察するの明があつても、内にそれを醗酵さす情熱の湧かない限り詩は絶対に生れないのですね。詩人は内に燃わだざる情熱の力によつて無機から有機を生み出すんですね。そこに蠟細工と人間の區別があるんですね。詩人の胸に一つの酵母が宿るさき、詩人は直ちにそれが醗酵作用をはじめないではゐられないのですね。詩を作る詩人はみな詩人でなければなりませんね。

詩人の魂は如何なる場合にも健康でなければなりません。詩人は如何なる場合にも己れを見失つてはならない。自然に背いてはならない。人倫を蹂躪してはならない。人を害してはならない。回避してはならない。想像によつて解決してはならない。詩人は澄み渡つた淵の如き靜かな心眼をもつて、ものゝ眞をみきわめなければなりません。詩人は、春の百舌鳥の如くなやみに正直でなければなりません。秋の雁の如く甘くない心をたもたねばならない。己の心に湧き起る波紋の一つ一つに己の生命を汲

まなければなりません。技巧を妥協して安僧な混合香水を作つてはならない。染料によつて色揚げしてはならない。詩の言葉の一句一句にはかすかなト息の如きものにも、魂の眞が宿らねばならない。人の心を打つやみがたさがなければならぬ。詩はさこまでも眞實でなければなりません。眞實を離れて詩はない眞實な心の動きには、如何に小さき波紋の一つにも天地自然の悠久が息づいてゐる。そこには幾千萬年の苦闘をつゞけて来た人類生存の眞の血が脈打つてゐる。それを忘れて詩はない。詩の究極には人間の熱い涙があるばかりだ。私は思ふ悲しければ泣き嬉しければ泣くその涙あるばかりだ。私は思ふ。悟りが何であらう。風雅がなんであらう。それらはたゞ詩の一部分に過ぎない。大海に落つる一滴の水でしかあり得ない。人間生きてゐる限り迷ひの奥に悟りがあり悟りの奥に迷ひが控へてゐる筈だ。悟りとは畢竟冥途の旅の一里塚であらう。そこまで來つた人の記念碑でしかあり得ないのであらう。風雅といふも多岐多様な人生の旅の一筋の道に外ならない。否一筋の道の一つの宿でしかあり得ないかもしれない乳呑子を抱へてむつきの洗濯をする母の心境「……けむりもにはいさやうなら」の心境のさちらを選ぶかは人々によつて一定しないであらう。吾等が詩への目標はたゞ一筋に涙への讃仰に外ならない。涙の中にまここの笑ひであり涙の中にこそ救ひがあり安心立命があ

り許しがあり得るのである。物を意識して何が生れやう。小指一本のおかわりはない。義手は永久に義手であるばかりだ。吾等はたゞ涙を信ずればよい。詩のありがたさは涙のありがたさでなければなるまいと思ひますね。

よき詩の前に人の心は平靜であり、恭順である。そこに太陽が輝くのである。よき詩の前に人は雲雀の如くよくしやべり、リスの如くすばしこく秋の空の如く清き瞳をもち十五夜の月の如く丸く笑ひ得るであらう。吾らは今少し自然に眼をむけねばなるまい。自然のふところを抱かれねばなるまい。自然をはなれて生き得る人間はなく、自然をはなれて健康な詩は生れないであらう。吾等が鼻をまごわさんとする便所の防臭劑を花の香に間違へる虫はゐないのである。吾等は今少し自然を知らねばならない。ウソに敏感でなければならぬ。詩人は一先づ誇張と技巧からつゝしまねばなるまい。

今は世を擧げて資本主義文明の濁流に押し流され、競ふて物質萬能の十呂盤を弾くが如しさいへごも、空にひきたび雲怒るごき誰れか一人ごして大詩人の偉業を恐れぬものがあらうか。經典を開くごき、バイブルをひもごくごき、たれが釋迦基督を謙仰せずしてゐられやうか。是等大詩人はしばらくおくごも、芭蕉が石を抱きしめて旅をつづけたのも一茶が襦袢の中に大往生をこけたのも、輩哉が土にしがみついて生きたのも、バイロ

ンハイネの情愛もこれみな一筋に魂の眞の道に精進したのであつた。詩人の眞こそ永遠に吾等が血を洗ひ潔め、吾等が生命に水を點するのである。

おゝ詩人よ、卿等は今空のいつこにありて吾等が足許を眺めてゐるのか。(一九二六・七七記)

句會のお歸りには

新戒橋 萬 よ し へ

川柳家のお寫眞は是非

黒木寫眞館へ  
西宮市與古道町三二

新聞雑誌の寫眞版凸版は

豊田製版所  
大阪市東區徳井町二丁目  
電話 東一二二四八番

新聞雑誌 其他の印刷 藤本兄弟社

大阪市東區農人町二  
電話 東一七〇番七七〇番

# 第七回 柳談會雜記

喜田飯山

## 第七回柳談

會は十日午後一時から例によつて鳴尾遅日荘でひらかれた。會するもの、路郎氏夫妻(鳴尾)紋太、嶺月氏

(神戸)馬行(豊中)葵豆(西宮)萬よし、松郎、二柳子、刀三、ひろし、眠聲、鮎美、飯山(大阪)の十四名、夕方近くまでは、同人ばかりであつたので全く社務のために費した。灯がついてから、私は川柳以外の話をして「外國貿易船内小景」さいふ題の下に一寸した坐談をころみた。あなたも熱心に聴いて下さつたので話し甲斐があつたと思ふ。こゝに感謝の意を表しておきます。三十分ほどの時間を限つて雑吟數句づゝを作り、披講互選の形式をとりました

その收穫を録すれば、左の通りです。あさあその事が氣になる人さ飲み路那

校長さ意見の違ふ父をもち同  
別府染さうく縫はす夏がすぎ蔑乃女  
なにを買ふでも夜の丸丸に入りひろし  
似たものゝが夫婦黙々妻さ僕眠聲  
忙がしい方が荷車押してやり萬よし  
秋の夜によその宗旨が聞て來紋太  
膳棚に西洋皿がだいぶ殖は同  
未亡人由々敷ものを求めたり同  
父は亡いおお前の母は薄情だ同  
もう團扇置きたんすの間に落ち鮎美  
まづい〜と亭主みな喰べ同  
なにもかもわたませの三味を弾き飯山  
妥協したやうに人には見えてある同  
飯國する身には道頓堀もなし同  
妹の心遣ひがこまかすぎ葵豆  
行つてくるぞさ位牌を留守にする同  
飯たきにゆかさ母のたよりなり同  
まつすぐに坐つてなげきある身を同  
添乳しながら氣がゆるみたり松郎  
叩いてる音さは木魚おはれず同  
學校をかくんで草のなびいてる同  
上敷の下にひそんで見たくなり同  
折箱のふたが散つて風もよし同  
子守唄亭主もそれであつてしまひ馬行  
年頃さみなが云ひます祭の灯同  
あゝそれも戀さいふゆへ入れておこ同  
二階から來て臺所で朝を脱ぎ同  
▲なほ、頂戴の句および没の句の中で、

問題になりさうな句を抜き出して、徹底的に検討した。

▲川柳雜誌社では、破調の句でも頂戴する。そして、頂戴のあつた句が必ず同人の句である。川柳の宣傳と初心者指導を標榜する同社の態度としては、をかしいといふ噂が一方に出てゐる。いふことから、語頭はリズム問題へ急轉した。私も右の噂は認める一人である。

蛙を踏むまいさ神經衰弱刀三

刀三君の斯うしたいき方の句は、今す

こしなんさかならないものであらうか

いふ馬行氏の質問に對して、路郎氏は、

この句の場合リズムの點に不都合はない

リズムの大切なことは云ふまでもないが

近代人のデリケートな思想や感覺を盛る

にあつて、多少の破調はみこめない譯

には行かない。しかし今のところ例外的

にあつかはれるべきものさ應ぜられた。

羽左衛門や源之助の用ゐる臺詞と井上

正夫あたりの用ゐる臺詞とは、リズムに

おいて兩々比較することは酷である。内容におもきをおいた場合に多少の破調は止むを得ないといふお説であらうと思つた。

▲松郎氏の句風が、このごろ、ころつこ變つたが同氏にはむしろこれまでどの句に佳作が多いといつた人に對して、同氏は目下、過渡期にあるので今に過去のコンベンショナルな手法を用ゐるた句より更に出色の佳句を生産してお目にぶらさけるご力んでゐた。

▲川柳雜誌社同人の中で、ある部類の人々からは、尤も不可解な川柳の作者として見られてゐるのは、十目のみるころ十指の指さすころ、黒木茨豆氏であらう。その茨豆氏は、いかなる場合でも、茨豆といふ署名によつて、句を鑑賞して貰ひたいと、鋭意強調せられてゐた。

見上げれば二階に椅子の端が見ゆ路那の句にしても、路郎といふ署名のあるごないのミでは、句からうける感じにお

いて、格段の相違がある、ご松郎氏も茨豆氏の希望に同意を表してゐた。

▲茨豆氏は最近お嫁入前の令妹清美さんに死なれたので、炊事萬端を御不自由なごであらうごおもつてゐた時果然ま、炊きにゆこかき母のたよりなり

ごいふ句をものせられた。氏ご私ごは生國を同じうしてゐる關係から、右の句には強く惹きつけられた瀬戸内海をこゝて來た、お母さんのお手紙を讀んでゐられた氏の手先氏のひごみ氏の胸中、すべては、ペーソスの溢れてゐる大寫であるごおもひます。

▲端の坊や、日本橋クラブにおける毎月の例會は、事務ごいつたかんじがするご誰かゞいつた。なにも、例會の方を荷厄介に思つてゐるわけではないが、さうしたかんじの湧いてくる時もある。けれども、例會には例會の持味があり、柳談會には柳談會の醍醐味がある。柳談會で、お互に、膝を交へ胸襟をひらいて話合ふご、異中あるひは同に逢ひ、同中あるひ

は異を發見して、裨益するごころ、決して確少でない。亦樂しからずやである。午後十一時閉會。私はごころの中で、柳談會萬歳を三唱してあの遅日莊の二階をおりた（十月十二日）

乙折心みも

# ルービヒサア

シロトシンボリ

柳雨「誤謬に就て」

竹馬居主人

▼ばかされたやうに日用は二本さし貴説の如く日備正し、日雇さかいてヒヨウと讀ませた例はいくらもある炭俵「朝顔や日備出て行く跡の塚」

▼朝路から戻り大根のこもを取りアサジは朝勤さかき、朝勤参さ云ふが正しい一向宗で早朝御堂へお参りする事である、今宮心中「御堂の朝参りにも女子供起こして、苦勞かけては後生にならぬ」、明日より朝参れず願ふ御生も願はぬ

▼鎌倉は度々召人の舞つた所召人には貴説の如く、メカケ、ツバメの意味もあれど、トラヘビト、囚人ミして用ひた場合もあり、召人ミ譯したからして必ずしも誤りではないと思ふ、句意は貴解のように今迄は存じてゐます、囚人奉行もあつたから、何れを御採用になるもかまはぬようである、私は假名にして

置いた方が感が好いと思ふ。▼あだのある子の母親のうつくしさ原本二三種にあだがあれば、貴解の外くだしようもありますまい。

▼政宗ではなはだもめるかたみわけ正宗をわらづこにして江戸へ出し活字本の川柳集をみたら、やはり此通りに刷られてある、十篇が見當らぬは残念なるも十一篇原本には、後句は明かに「政宗」になつてゐる、然し刀匠には正宗あり政宗あり、何れも代々續き又名作を残してゐる、原本通りに改めぬを可なりと思ふ。

▼まだ動く瓦へ奉書の紙をかけ原本の尾の字は、瓦の方によみ易い位ではあるが、他にも例がある事だから出版者の不注意は許せぬ「尾張丁」なごみればよもや瓦さしかけぬけ、川柳集には「尾」になつてゐます。自分は柳雨翁により三十篇迄の底本の出来るを悦び入會した次第であつた。

あさじに就て、或る人朝寺さかきしが無

論誤り、眞宗の僧侶に尋ねしに、時言へり、余は疑ふ、余の前説正確なれ共朝事なれば普通にて可ならむ、即ち拾遺冬の部に

朝事から歸り大根のふたをこり  
ミあり、(此句柳樽の下五菰をこり異なる)朝事即ち朝勤参は晨朝勤行の事也  
▲「まさむねをわらづこにして江戸へ出し」の句意は余再考しつゝあり

柳風南北

一杯の無道酒より

安川久流美

團らんなくして一家の幸福なし家庭を混亂さす、酒を用ゐるんよりは毎食前の赤玉の一杯！  
この一文は、ぶさう酒の廣告である、句としての價値はないが誰か「禁酒はぶさう酒から後戻り」さいふのが思ひ出されて微苦笑！この頃柳界革新の傳統の効能のミさ合ひは、右の迷文ミ似通つてゐるやうである。

柳壇を混亂さす『革新』を用ひんよりは、研究前に柳多留をよめ！

ミ、老人がいひさうな文句もあるやうでならぬ。

酒もぶさう酒もウイスキーも程度問題である、その中に含有されてゐるアルコール—それが味じやないか。

一利一害、酔つてくだまきや同じ事だ、我田引水論をやめて句を作るこゝ、時は移る、時は移る。

森の家のいふ社會批評といふのは所謂川柳味を醸すべきものであらうと思ふ、川柳は藝術が娯樂かは第三者の御勝手次第で、私は川柳味を得んが爲めに社會批評の立場にあるものを川柳作家と稱したい。

もつこお互に實生活を見つめたら傳統だの革新だの境界争ひをする必要をみこめない、無人島も知らずに無人島の句を

作つたりするのは遊戯であつて、小説の一句から十七字を仕立て出す作家を生かぢりこいふ。

× 奪い十七字は一年に一句でもからう、

安定を通り越して生活の豊かな時は、いゝ句の生れないのは事實である。同時に人間の不満は川柳に凝りかたまる現象も屬々ある、だから句作に於て個の生活境遇を想像し得るだけ偽らざる作品を見せて貰ひたいものである。

× 眞實を掴むにはずいぶん骨が折れる、その社會思想の縮圖が句になつて表現される。

× 雲右衛門が『義士傳』を米糧にした如く古川柳の研究が米糧のやうに思つてゐる一部の川柳家にも愛想のつきる事だが、自分の働きがなく『古川柳』といふ骨董

品の一つも飾つて置けないプロ階級に不満を抱く必要もあるまい。

× 川柳に形なし、その無限なるこゝ空氣の如く、流るゝこゝ水の如し。一步は一步けふの句はきのふの句となりきのふの句は一昨の句となる（九月二日）

## 川柳は貧乏人の歌

### 三好革郎

□川柳は味はへば無限の味が湧く、鯛の刺身であり、鮪の鮓である、信長が瓢箪の珍味を水臭いと言つて田舎者さ笑はれたやうに、本當のいゝ川柳の味さいふものは我々のやうな籠で迂路々々して居る者には分らないのが當り前だと思つた。しかし不味味の贅澤を言つて居るこゝの出来ない者にまつては、川柳はさうなるのであらう？米の飯でも米の産地、炊き方、水加減、火加減、燃料の種類で味が違ふ。本當の食通さいふのは飯の味が

分る人だといふ話である。川柳は副食物の位置から主食物の位置に變る必要がありはしまいか。いゝ川柳の味が分らない自分はこんなことにさへ迷ふ。

俳句は寂を尊ぶ。解脱を重んずる。これは現在の生活に恵まれた者が、丁度飽食した後に淡泊したお漬物を要求するのと同じに、満足の生活の後に求めた單純味、わづらはしさから脱れたい念願から生れ出たものではあるまいか。賑やかに騒いだ後の静けさ、あれが俳諧の天地だと思ふ、それだけに俳句は氣持の上から言へばブル的傾向が多い、俳句を作る者に生活苦にあゝいで居る者の少いのは斯うしたところに因がありはしまいか。

川柳は即身成佛である。寂も解脱もそんな面倒臭いことは言はない南無阿彌陀佛といへばそれでいゝ。生活の聲がその儘川柳である。月給が上つた。誠首になつた。女給に惚れた。女房に叱られた。友達と遊びに行つた。借金取に責められた。皆んなそれが川柳の題材になる。それ

れだけに川柳はプロの藝術である。被擗取階級の聲である。俳句を保守的といへば川柳は進歩的である。俳句を資本家本位とすれば川柳は労働者本位と言へる。それだけ川柳家の中には金持が少いのはなからうか。(こんな事を言ふと怒られるかも知れないが)

公憤といふ雑誌を編輯してつくづく日本が貧乏だといふ事が分つた。貧乏であるのは、生産科學を所有しないからだ。川柳に科學を題材にしたものが少いのは我々日本人が生産科學に對する知識がないからだ。これでは貧乏人が多いのも無理はないこれではいけないと思ふ。

貧乏は罪惡だ。凡ての罪惡は貧乏を母として生れる。この意味から云ふ川柳は貧乏人が悪い事をしない代りに出す悲痛を叫びだとも言はれる。

石川や濱の眞砂は盡きることも世に川柳の種は盡きまじである。その種をぎんなに生かすか川柳家の手腕である。貧乏人がぎんな世の中が來ても盡きない以上

は川柳は榮へる。此の意味から云ふ川柳の盛んになるといふことは悲しむべきことである。(内容的の問題ではない) 門外漢に等しい人間は川柳をこんな風に考へて居るといふことの御參考までに書いて見た。妄言多謝

### 新戎橋より

万よし生

早く一家をなしたい

曾我の家は蝶七君がよく呑みに來て漫書ミ狂句を揮毫するが、巧妙といふではないが隨に一家をなしてゐる。舞臺で蝶七君を見ても、五郎、蝶六、大磯の味の外に蝶七君の甘みがある。好き嫌ひは別であるが蝶七君一人で舞臺を背負ふ場台言ひ換へれば蝶七君でなければ出来ぬ役柄がある。新國劇の倉橋君が、舞臺に立つてゐた頃、この人の忠僕なきは他に真似が出来ぬものがあつた。卯三郎の丑五郎や、松助の蝠蝠安や故梅玉の係右衛門な

きが堂々一家をなしたことは言ふまでもない。

三越で催された一茶の遺墨にも一平をもつて省筆した畫がちやんこ一家をなしてゐる。

同人放馬君が五六本平けた頃の漫談も氣焔は同君の漫講以上に痛快堂に入つたものである。

同人かほる君が戯談の言ひ方も知らぬ様な顔で作句せらるゝ句に洒脱、輕妙他人の追従を許さぬ妙境を示されることは、大阪柳界の珍にするに足るものがある。

川柳は作句者の人生觀の表顯であることは誰しも異存はないが、人生觀の七分は先天的のものであつて残りの三分が教育境遇、運命なごの司配を受ける後天的のものである。

作句の向上の極意は主筆の「廣く社會を見ること」が必要なのは言ふまでもないが、深く自分を堀つて見るこがより以上必要なことだと思ひます。

自己を内省する、自己を研磨する、自己を發見する。大聲を上げて天に訴へる、天上必ず聲あるべし、滿身の力を打つ大地必ず響きあるべし。自己は宇宙の小なるものなり汝が爲し得る仕事を汝の周圍の外に求むるを空想といふ。起居、寢食、順境、逆境、汝自ら發見し、開拓し向上する善知識が汝を圍繞することに心眼を開かねばならない。

人生は遊戯でない以上はそのエツキスである川柳に何處に遊戯の餘地があらう。習作の手段としては〇〇氏調を頻に試みる大に可なり俳句境を大いにねらふて見る更に面白い。名句を見付けて百句をこの調子で作句して見る熟や嘉すべしであるけれども根本に於て題吟と共に自己を發見する手段、道行きにして一家をなす殿堂でもなければ目的でもない。

鷹次郎巧なれども女形はやらない。長三郎拙なれども、舞踊は堂に入る。一家をなさんとするものは自己の短を知つてこれをブチ切ることだ。天資貧しいけれども、創作の一つも出来るものには、絶対に他人が真似られぬ、或るものを描つて生れてることを自覺せぬはいけない。兩刀使ひ、其の日暮し、昨日は東今日は西これ柳界の醉生夢死の徒にして屁をひつた時だけ存在を認めらるゝに過ぎない。呼喚人生は短し、眞理は永遠なり。一生俸を曳いても、マラソンの選手になれるものでないことを御互に早く氣付かねばならない記して自ら戒むこと然り。

# 第一番大吉歌占

(朝日會館新聞展にて路取)

## 超第六千手感應 御くじ

大君の恵みあまねし朝日さす瑞穂の國や  
みつくにまでも 讀人しらす

普大の下卒土の濱 王土ならざるはなく  
皇威八紘に輝きて海外に發展するわが大

和民族よ わが朝日讀首よ

家内安全 息災若返 商賈繁昌

家庭圓滿 南無千手感應貴者

正確速報宗 朝日山社會寺  
總本山

募

集

句

割前

淺井五葉選

割前で飲む法善寺 安いこま 琴香  
 二次會は割前でもなささうな 案山子  
 割前を飲まない方は持つてくる 万よし  
 割前が皆出揃ふて手を叩き 白鷗  
 割前を氣の毒さうに請求し 山花紅  
 割前の一人が出してみんな出し 露斗  
 癖が出て割前の外に辨償し 志郎  
 割前の一人歸れん程に酔ひ 山月  
 二三人幹事割前さりかへる 柳秀  
 割前の方はお二人様さあり 突支坊  
 割前を立て替へて置く金があり 芳香子  
 給料のあさから割前廻つてる 大夢子  
 割前の氣輕さでのむ三四人 光路  
 割前の腹をくゝつて飲み續け 彩秋  
 割前を拂ひ節季が近いなり 聞路  
 圓タクもその割前の中に入れ 同  
 割前に説明の要る 赤インキ 吐露樓  
 割前さ見くらべて出す銀貨入 同

一人だけのけて割前數へ出し 二柳子  
 最初の豫定割前少ししたし 同  
 割前の揃ひも揃ひ五圓札 馬行  
 割前の事に電柱の蔭へ来る 同  
 おひらきに割前だなき仲居知り 同  
 割前の端したが残る盆の上 同  
 割前に人の錢入覗きに來 同  
 寅公るるかき割前を集めに來 同  
 割前にみんなさうんがちやかせ 同  
 (佳) 割前に割前同志つりが要り 聞路  
 (佳) 割前にちつぎ意外な顔も 馬行  
 (佳) 割前に銅貨の混じる面白さ 同  
 (佳) 割前にいっ氣樂な馬鹿騒ぎ 同  
 (佳) 割前に鉛筆が要る事になり 同  
 (人) 割前で乗る圓タクのせいと 三斗  
 (地) 割前の舟自動車の中でつき 馬行  
 (天) 割前の遊び矢つ張三味も入れ 同

柿

林田馬行選

小説を聞く手に柿がむけてゆき 三斗

祭も近し柿をむいてる 悟郎

川柳家の戸籍調へ

係 馬行生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所  
 (五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八)  
 好きなタイプの人 (九) 自信の句 (一〇) 川  
 柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 嫌  
 ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(107) 吉本 寛汀

(一) 吉本雅美 (二) 寛汀 (三) 昇山人 (四) 大  
 阪府中河内郡小阪町下小阪六七〇 (五) 明  
 治十八年十月十五日生 (六) 大阪新日報社  
 社會部長 (七) 格別これと言つて日頃愛誦  
 するものはなければ敬服する句は無數、  
 好きな句風を云へば技巧に無理なく調子  
 に苦澁なきもの (八) 少壯時代には鏡化式  
 の女を幻に描いたものなり、今では上方  
 式の柔かい女性美を禮讃す、しかし江戸  
 前の心意氣も悪くなし、モダンガールは  
 お断り (九) 有りさ云へば悉くあり、無し  
 さ云へば一つもなし、要は程度問題なれ  
 び、これこそ我代表作なりと示す 題名  
 の如きは未だなし (一〇) 廣く、淺く蒐集  
 もいろく、試みて一つも完成せず、目下  
 は小花壇や菜園の他では繪畫、劇、肩の  
 凝らぬ讀書 (一一) あり (一二) 不誠實、不  
 眞面目、沒常識の人、自我強き人、殺伐  
 鬭争、鹽辛、海鼠、ナフタリンの匂ひ、  
 (一三) 久良岐氏の「五月鯉」を愛讀した時

柿の色になる時がない子澤山 案山子  
 柿の種猿は不審な顔をする 眠聲  
 學校道寫生の柿を二つ 買ひ 鮎美  
 柿の木の辻で婦人待ち受ける 万よし  
 父の計に歸れば柿の赤々こ 一 狂  
 腰掛けて礼所に近い柿をむき 山月  
 (軸)柿赤しこゝか村に云云 馬行  
 (選後に) 柿と云ふ題は非常に難題で、佳句  
 と認むべき句が一句も發見し得られなかつ  
 た事は遺憾です。頂戴した句の中でも柿その  
 ものを詠んだ句が少なく、いろんな事件や背  
 景を柿へ組合せた作品が多いやうです。こ  
 の方法も作句態度の一つで、もとより批難は  
 出来ません。要するに柿と云ふ題に最もふさ  
 わしい境地を觸む事が肝心な事と思ひます  
 古句を見ましても

よく見れば手の届くだけ溢い柿(古句)  
 の他にも少しはありますが、佳句は見當りま  
 せん。私の頭にも柿の句の記憶はあまりあり  
 ません。僅かに

柿ころけ出で、明るき家こみ(紺の介)  
 の一句が記憶に残つてゐるだけです。

して見ると川柳には柿はあまり詠まれてゐ  
 ないさ見るのが至當かと思ひます。我々は努  
 めて斯うした難題に屈せずぶつつかつて未  
 到の境地を耕やさなければなりません。  
 終りに没句の中の四五句に、首評を加へて御

参考に使いたいと存じます(馬行生)

待つてゐた熟柿は人が先に取り

(評) 調子から行つても立派に川柳にはな  
 つてゐますが、惜しい哉、幼稚な穿ちに終つ  
 つてゐる事は否めないでせう。今は好作家と云  
 はれる人達も初めは大低斯うした境地から  
 進んで来たのですから屈せず一層の努力を  
 願いたいものです。

溢柿ご知らずに子供持つて逃げ

(評) うつかり囁つた柿が溢かつた。と云つ  
 たやうな句が、大半を占めてゐた集句の中で  
 この句は稍々まとまつてゐるさと思ひまし  
 た。矢張りまだ、平凡、幼稚の圏内を出  
 る事は出来ないでせう。川柳も創作である以  
 上、十人が十八考へてゐる境地をうろつて  
 ゐるやうではつまりません。早く斯うした境  
 地を卒業して個的な世界へ進んで戴きた  
 と思ひます。

髻をかきあげて熟柿にかぶりつき

(評) 髻に味喰汁が付いた。とか云つた句は  
 よく讀みますから、その反對に髻をかきあげ  
 ると云ふ事もある事とせう。然し下五のかぶ  
 りつきがあまりに誇張すぎて嫌な感じが致  
 します。安っぽい漫画を見てゐるやうで句品  
 と云ふ方へも影響して来るでせう。もこく  
 川柳には誇張も必要であり認められても  
 ます。是は川柳斗りてなく他の一般文藝も同

代。

(108) 辻 左馬

(一) 辻貞次郎(二) 左馬(三) 天地樓(四) 和  
 歌山縣出邊町幽靈山下(五) 明治(七) 二十三年  
 十月二十日生(六) 柳陰社副社長(二二) 振  
 袖のもけきうな場へ母の聲(一八) 新舊和  
 洋舞臺で見る様な女(九) 皆自信ある句と  
 します(一〇) 昆虫類(一一) 有ます(一二)  
 魚のダシで煮た野菜物(一三) 大正元年頃

(109)

中沼 若蛙

(一) 中沼力半(二) 若蛙(三) 水天(俳句用)  
 四) 劍花坊ご同國に生れ、現住は大連市  
 須磨町二二號(五) 明治十二年二月五日生  
 (六) 船の機關長(七) 百川柳の内「本降り  
 になつて出てゆく雨宿り」米つきの明る  
 みへ出る一摺み「仲直り元の女房の聲に  
 なり」(八) 脊高の毒婦型(九) 「新柄と云ふ  
 は木綿の事でなし」男の子黒い涙を出し  
 て泣き(一〇) 俳句と義太夫(一一) 女房  
 も大分老けて子澤山(一二) 巧言令色、精  
 進料理、切支丹と米國人、鼠と狢(一三)  
 俳句をやる當時は川柳を狂句扱ひにして  
 るたが明治三十六年八月川柳として認め  
 大正五年二月より作す

(110) 森下 冬青

(一) 森下治作(二) 冬青(三) 無(四) 金澤市  
 下新町金丸守中方(五) 明治三十七年六月  
 十八日生(六) 染畫工(七) 「扇子からそれ  
 〱 噓がほこばしり」久流美、誰はゞから

じです。古川柳などにも可成り誇張の句が多いやうですが、不思議に先人はこの誇張を巧みに活かしてゐます。後人の學ぶべき點かと存じます。

澁柿に口一杯の唾を吐き

(評) 普通の句であります。然しこの句から受ける感じは決していゝものではありません。それは扱つた句材にも據る事でせうが。

我々作家は汚穢な材料をも第三者をして恍惚たらしめる迄の手腕を養ひたいものと思ひます。

出來得る限り美的に洗練された表現に活きる事は、今後の柳壇に最も要求する處で、讀者をして社會をして川柳に對する斯うした方面の不快をまづ一掃させる事が急務であります。この作者は句もみんなよく纏つて居

### 皿

◇ 番 翁 選

仕出し屋の皿の生妻が派手に見  
大世帯仕出し屋程に皿を積み  
灰皿へマツチの底の抜けたまゝ  
上かん屋腰を下ろす皿を出し  
灰皿へデユン云云はて尻を上  
貧しい仲に皿がかけてる  
露斗  
菓解けば皿さらくさ横にずれ  
殘紅  
客が来て皿の端數を知つた宵  
龜珍

ります。只想の選擇に今後留意願へれば進境著しいものがある事と確信いたします。

赤い柿松から烏狙つて居

(評) まるで子供の繪を見てゐるやうですが、幼稚のうちにも何だか惹き付けられます。云ふのは烏の黒さ、柿の赤さと松の青さへ碧い空の色、と云ふ風に考へそこへその色にふさわしい思想、と云ふ風に選者一流の聯想辭を加へます。可成り面白くなつて來ますが、それは私の單なる取越苦勞で作者がそんな複雑な材料を扱つてゐるのではないのでせう。よしさうであるとしたらもつと外にさるべき表現法もある事と思ひます。このまゝの句では物足りません。

廣川 番 翁 共選

何口割つたさもなく様の下の皿  
新世帯洋食皿へすしを乗せ  
果物の皿その儘に借らず去に  
皿までが温泉宿の色を見せ  
戲談を擱いて女給は皿をよみ  
皿一つ毀さず年勤め上げ  
一皿が空いて煙草の置きどころ  
トマト丈け残して次の皿を待ち  
洋食の皿の大きさ無駄なやう  
案山子  
同  
万よし  
同  
無心  
同  
大夢子  
同  
千鳥

ず内の人内の人(八)松郎(八)川柳に理解のあるそして活潑でおこなし女、顔は水谷八重子梨(九)作句中(二〇)映畫、浪花節、義太夫(一一)無(二二)金持ぶる人、生意氣な人、川柳に理解のない人は兄弟でも嫌ひです(一三)大正十年より一年程やり二年程休んで大正十四年八月連夜會より復活。

(三三) 武田 彩霞

(一)武田純郎(二)彩霞(三)頑夫、素堂(四)花遊檢書所(五)明治二十七年十月十六日生(六)安物官吏(七)長命の相ある男門を掃き「象の鼻招くが如く吸ふ如く一その他にもあり(八)いつも髪をこわさずにある女、敢て美醜を云はず(九)更になしいつも水平線以下の句ばかり、(一〇)がらくた道樂、次々變つて目下は土俗、玩具をロハで蒐めやう云ふ慾張趣味(一一)配遇あり子供四人サンガ(一二)大正七年秋神戸又新川柳大會に出席したのが始まり。

▲万よし 戯作

眼はじきを止めて飯山筆をこり  
額に手をあてて馬行に一句出來  
締切の時を二柳子あやまたず  
眉に皺よせて刀三頂戴し  
きつうすましてかほるさ答へ

(手紙の中より)

猫の皿汚れた儘で乾からびる 同

皿の音もう歸ります座をすべり 光路

賣切れに皿の汚れを見て歸り 同

皿廻し兩手で受けて終ひなり 同

何日さいふ事なしに皿破れ居り 柳秀

灰皿を消したつもりの煙が立ち 同

ペランダへ灰皿を呼ぶ好い月夜 同

破れた皿合せて見るも女なり 同

(軸)斷。決。待つ。の。へ。皿。が。殖。は。番。翁

裸頭の爲か佳句に乏しかつたのは、選む者に

失望を興へる。非常に繰選をしてやつこ之れ

丈け抜きました。私ば句數の多いゆより一句

でも二句でも好いから洗練されたものを欲

するのです。然し初心者へは難かしい注文か

も知れません。兎に角「ヒント」は軽く作句は

重く」と云ふ言を標語として作つて頂き度い

のです。

### 各地柳

東洋鬼選

#### ◆万よし川柳 (二拾八回)

短冊

前田雀郎選

書き上げてから短冊は見直され 雲谷  
短冊の一字一字へ梅が散り 龍水

愚さは知つて割皿接いてみる 甚三郎

いつ割つたさもなく縁の下の皿 案山子

ペランダへ灰皿を呼ぶ好い月夜 柳秀

灰皿へ消したつもりの煙がたち 同

淋しさは病床へ来る硝子皿 万よし

錦手の皿を賞めるも仲人にて 同

猫の皿汚れたまゝで乾からびる 千鳥

釣つて来た小魚みなの皿に盛り 同

皿の音もう歸ります座をすべり 光路

皿廻し兩手で受けて終ひなり 同

錫皿へ華蘭の残る箸をおき 同

貧しい中に皿がかけてる 露斗

こわした皿を合せて見てゐる 同

さしみの終ひの皿も淋しき 同

破れた皿合せてみるも女なり 柳秀

灰皿へデユンミ云は尻を上げ 志郎

灰皿へマツチの底の抜けたまゝ 柚蘭坊

### 壇松郎編

短冊をペンで留めとく二階借り 大夢子

道具屋で短冊だけを抜いて買ひ 柳一

短冊を書きかけてフト用があり 艶六

短冊の稽古に別な筆を買ひ 南耕

うごんやの短冊値段表を書き 蛙聲

## 川柳書架 (二)

### 川柳參尾志 (一名川柳戰國史)

石田元季先生校閱  
西原柳雨著

▼本書のはしがきを次に示す。

愛知縣管内の地理歴史に關する古川柳殆  
んざ一千句を蒐録し、川柳參尾志と題し  
新愛知紙の餘白を藉るこゝにしたのであ  
るが、著者の目的は家庭の讀本として笑  
覽遊讀の間に青年處女をして地歴の幾分  
を知得せしむるにありて、もごく／＼學者  
や柳家の讀讀を仰ぐ積で執筆したもので  
は無い。されば篇中化政代の狂句多き事  
や正史とは多少の相違ある稗史小説的の  
俗談少からざる事なきば、豫め御諒承を  
願つて置かねばならぬ。兎にも角にも、  
參尾の二國は織豊徳三頭顯が呱呱の聲を  
揚げ、一興一廢驚天動地の大々の活劇を  
演じたる舞臺であつて、參尾志は事實に  
於て元龜天正より慶長元和に至る、前後  
約五十年間に亘る戰國史と謂つても謬言  
では無いと信するのである。猶句尾に、

短冊を釣るに姫ごせくたびれる 琢二郎  
むづがゆいこに短冊書かせられ 露斗  
短冊へ途切れた松が出来上り 淡風  
墨を掃り短冊をこころ構へ 同  
旨い字が書けず短冊裏も書き 洋々  
短冊の用意もあつて恐れ入り 三笑  
丸額の短冊を讀む晝遊び 同

五 寄

短冊がびつしより濡れて天の川 千鳥  
短冊を讀めない乍ら掛けて置き 大夢子  
短冊を脊中へ入れてから別れ 雲助  
短冊の想の浮んだ墨を置き 袖蘭坊  
本願寺短冊料で追つ付かず 失名  
(人)短冊の方より豫習旨く出来 淡風  
(地)短冊を半ば濡ばぬりつぶし 廣賀  
(天)妥協して短冊へ書く字を習ひ 失名  
次回題、「投げ挿し」五句 麻生よしの選  
十一月廿日締切、天地人へ選者短冊を呈す

◇阪神梅田小集(九月十三日)

景氣よく呑み直すのを引受ける 鮎美  
愛想よく迎ゆる妻へ呑みなほし 同  
障子しめぬも悋氣の一つ 同  
かつがれて居るさば知らず呑み直し 呑月  
髭面の關羽氣取りで伸ばすか 同  
貧乏は障子の穴を見つめてる 案山子  
兩手をあけて呉れぐさ飲み直し 同  
障子ばた々疎の赤し眠聲

さて嫌のない奴ばかり呑み直し 同  
髭面の昨日刺つたさ見ぬまいが 同  
◇刀根山觀月小集(やなぎ會)

萩

園境のこゝにも咲いた萩の花 其象  
鐘の音あつたつ萩がこぼれたり 白蝶  
はらへ涙のやうに萩が散り 杏三  
萩さ萩萩さ萩さがつれ合ひ 菊之助  
投げ挿しの萩に團子の仰々し 桃哉  
瓢箪を孫に持たせて萩の寺 濤二  
萩の花昨日の風思はせる 澁面子  
高殿の萩風に揺れ風にゆれ 晴久  
白萩に萩の哀れを覺はたり 讚柳

月

満月に反抗もない顔であり 桃哉  
十五夜の朝から雲が氣にかゝり 杏三  
月一つ賞めに奈真迄出かけた 讚柳  
真い月をほめへ銚子ふねてゆき 董堂  
寝て月を見るに疊の冷たすぎ 晴久  
荒野原見る人もなく月が冴に 濤二  
ケアブルカー歸るに惜しい月を見る 其象  
月の事も歌入らしく書いておき 菊之助  
月を見に中風の母を脊に乗せ 笛呂  
◇万よし偶會  
父の訃音學士にはもう聞もないに 三笑  
ブラチナの齒から出てくる軽い咳 同

(寶)とあるは寶曆及其以前、(明)は明和  
(安)は安永、(天)は天明、(寛)は寛政、  
(化)は文化、(政)は文政、(保)は天保及  
其以後の句であるこゝを申添へて置く。  
大正八年七月下流 柳雨しるす  
▼大正十五年十月一日發行。四六版一七  
七頁。定價一圓五十錢。名古屋市中區南  
園町一丁目圖書刊行會發行。

▼直接句作上の參考となるべき本ではな  
いが著者のはしがきによつて充分察知し  
得られるやうに歴史に興味をもたる、方  
は一讀された。著者一流の努力が拂つ  
てある。

英譯川柳名句選(乾)

法學士 成見 延龜 共譯  
教授 上床 新助

▼その「はしがき」なるものをのぞくこゝ、  
柄井川柳通稱八右衛門は寛政二年九月  
二十三日吾人に川柳云云へる不朽の文字  
を與へて逝けり、有名な辭世の句に、  
「木がらしのあこで芽を吹け川柳」(中略)  
寶曆、明和、古代川柳(近代川柳に對  
し古代云ふ)、全盛の時代に柄井川柳の  
に選なる一萬以上の中より最も優秀の名  
句のみ三百句を抜きしもの即ち粹中の粹  
を集めて一卷となし英譯せしを本書とす  
從來川柳の俗なりこの評を受けしは重  
に天保期の句によるものにて本書所載の  
寶曆・明和期の句は滑稽を主にして淫猥

就職難大學を出て辯士なり 万よし  
歡迎の答辭の咳は二つなり 同

伊達巻の端しに今夜のお月さん 越村

伊達巻で思ふにうつさしいお客 三笑

伊達巻でほんに有馬は涼しおす 万よし

伊達巻のすつかり女房氣取りなり 同

新妻の散歩の支度やつこ出来 一文字

家持つて散歩の支度暇が要り 放馬

道ぶらに女僮を見るも久し振り 万よし

◇悟郎居小集(十月十一日)悟郎報

侍 互 選

侍と約束したが落度なり 久耶

酔ふてゐる侍の横走りぬけ 彩秋

内密に頼む侍手を合はせ 悟耶

面目を思ひ侍立上り 同

侍はこつちを向くと傷があり 開路

逗留の侍雨で甚を圍み 同

御勘辨をへ侍の強くなり 刀三

髪を剃る程侍の傷も癒は 同

侍と思ふ仕打が水臭し 飯山

侍の言葉少なく甚をかこみ 同

侍の抜く癖ばかりうまいなり 松耶

敵打つて更紗の夜具もなつかし 同

侍のもの摸つて来てはどがき 同

侍が惚れて話をもつて来て 馬行  
侍の晝寝の枕高すぎ 同  
侍の涙はすぐにかわくなり 同

平常着 互 選

平常着のまゝ親切のばら 悟耶

平常着に銘仙着てるいくら 久耶

平常着の歸りが遅く氣にか 三笑

ふだん着のまゝで新聞記者に逢 馬行

平常着をほんこの母と知る子供 開路

平常着に替へて首筋ひやりする 同

平常着になつて氣安う筆を持ち 松耶

お茶一つ飲んで常着に替へに立ち 同

平常着がよく寫つてる寫真なり 彩秋

平常着でよかつた雨に成つて来る 同

ふだん着に替へて忙しく米を出し 飯山

ふだん着になるこべつたり坐るなり 同

平常着で来て名論を吐いて去に 刀三

平常着にたしか煙草があつた筈 同

鳥籠 松耶 選

鳥籠を見上げて戀は續くなり 萬よし

しんとした部屋に鳥籠だけの音 馬行

鳥籠へ嫁入前をぬけて来る 同

鳥かごへ外人夫婦顔をよせ 飯山

鳥かごへ巡查も同じ趣味を持ち 同

あるじは外國にあり鳥籠 刀三

鳥籠へ毒婦恐るゝ事多し 同

に打勝つの用意充分なるが故に讀み去り  
讀み來つて滑稽の美感を脳裡に残すある  
のみ、巧妙なる所以茲にあり、況して稍  
や極端なりと思はるゝものは悉く之を除  
きたるに於てをや。

詩歌俳句の英譯は其數甚だ多しと雖も  
川柳の英譯は未だ世にあらざる、蓋し川柳  
は一般詩歌の如く風韻を吟味するものに  
あらずして徹底を主眼とし字句の美を云  
ふものにあらずして力あるものたらしむ  
るを主旨とするに依り譯文自から之れに  
律せられざるべからず、故に何人が之を  
試みるあるも勢ひ大同小異のものに歸着  
すべし、よく俳句の英譯に見る餘韻を言  
外に含ませる美名のもさに重に形容詞と  
名詞と僅かの勅詞と多くの感嘆詞との排  
列にて川柳を試んか如何にして川柳獨特  
の機智とユーモアとに溢れしめ得べき滑  
稽、深刻、徹幾、人情の機微を穿ち得べ  
き寸鐵の鋭鋒と活潑自在の妙技とを表は  
し得べきや。(下略)

大正十三年十一月 譯者識  
大正十三年十一月十五日發行。四六版  
より小型三百頁。定價一圓二十錢。發行  
者宮崎市旭通九十一番地野井楨太郎。  
▼川柳を英譯することの大膽さとその勇  
氣に敬服した。川柳を詩として譯出する  
ことは甚だ至難で外人がどの程度まで味  
讀し得べきかは疑問である。

編 輯 後 記

▲このごろは、もう火鉢をかゝへるやうになつた。それだけ本も讀めれば句も作れる。全く詩人のための秋さ冬、私はいつも斯んなことを思つてゐる。▲小出摺重氏の表紙は大變な好評だつたが本號はそれにも劣らぬ、吉田清氏の力作である大に味つて欲しい。▲原稿が相變らず輻輳する。それで本號では木村半文錢氏のもの二篇と、井上刀三のものを一篇割愛しなければならなかつた。その他、最初から次號へ廻つてゐる、原稿のあることは勿論である。木村氏の原稿は知らず、堆積して本誌一冊分に餘るものとなつたが、同氏の希望で全部焼棄することにした。▲川柳輝翠さいふ判を作つて笑はれてゐたほどに、川柳に熱心な森田輝翠君が、退社することになつた。勿論川柳を止める譯ではないから復活の時期もあらうと思ふ。同時に竹田芦穂君も退くことになつた。何れも川柳以外の事情がしからしめるのであるから、潔く同人名簿から抜くことにした。▲太田朝陽が、濱寺公園前一〇〇七番地へ移つた。同時に岸和田支部は濱寺支部と改稱して同所へ移つた。▲多聞、双柳等一行十四人南紀白濱温泉に遊び、小生が白濱館に残した、悪筆を館主に見せて貰つたさうである。▲駒人は千葉を出て、東京中心に各地をおそび廻はつてゐる。近くは伊豆の大

島から頼りがあつた。そののんきさを見せつけられる、私のやうに忙しい人間にはたまらない。▲革郎は社用で下關から、長崎方面へ出かけた。い、收穫があればいい。▲美の作は柳友故伊東夜叉郎氏のために、眼を痛みながら筆をさつてくれた、近く上京しなければならぬやうな手紙もくれたが、もう出かけたから、私も行かればならぬさ云ひながらいよ／＼さいふ日がなくて弱つてゐる。▲右大臣が來神したので逢ふつもりである。金澤から山代山中の方へ飛んでしまつた、いよ／＼歸仁する十三日の朝、兵庫まで出かけて逢つた。神戸驛頭で別れた。▲万よし野球部は僅に二點の差で敗れたさ知らして來た。敗れても知らして來るころは万よし式である。▲本誌の漫書寄稿家島平、柴舟の兩氏は國三郎、茂生、音三、鳩甫の諸氏と關西漫遊會をおこした。▲朝鮮の川柳家福島柳也君が、七日に事務所へ來訪されたさうであるが小生は、逢へなかつた。▲東部の柳翁忌は、なが／＼盛大であつたらしい。お祭騒ぎでなく大いに意義のあるものさして續行して欲しい。▲檜山千代二君の勤務先日本養養協會が、東京市麴町區有樂町三ノ三へ移つた。▲酒井枝呂君は大阪市浪速區河原町二野村商店廣告部へ移つた。▲本號は二柳子、松郎、飯山、刀三と私で編輯した。(路郎生)

川柳雜誌同人

主幹 麻生路郎

高橋かほる	龜井花童子	河南放馬	太田徹底郎	太田朝陽	徳田双柳	西垣松雨	橋本二柳子	林田馬行	原史風	馬場月三	井上刀三	伊藤彦造	岩崎柳路
庄三好	喜田飯山	酒井駒人	佐々木黙闇	麻生霞乃	駒井美の作	藤本卯之助	松川助六	柳右大馬	矢田洲	黒木莢豆	塚崎松郎	竹内多聞	高見柳骨

(いろは順)

道頓堀支部	天満支部	濱寺支部	築港支部	城南支部	西宮支部	淀川支部
萬よし	史風	朝陽	飯山	美の作	莢豆	松雨
神戸支部	山口支部	豊中支部	東京支部	函館支部	住吉支部	仁川支部
萬よし	洲馬	馬行	柳路	花童子	双柳	右大臣

社主藤堂氏の

ための悪文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焔をあげて、あとであんなことを云はればモット本が賣れたらうにさ後悔をするところなど仲々うれしとおぢさんである。なんでも社會に貢獻するために本屋をはじめたのだといふてゐるがさうかも知れない。大いに讀んで（大いに買つて）このおぢさんを満足させて下さい。

|| 路 郡 生 ||

正に耽讀の好季節

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

# 清 酒



白鶴を別荘で飲み宅で飲み  
酌をする度に白鶴頂かれ  
よろこびに添へて白鶴届けさき

—□—

これはねむ白鶴に生きてゐる  
白鶴をいつもきらさぬくらしむき  
白鶴の方に幹事は極めちまひ

灘 津 攝

釀 社 會 名 合 納 嘉

### 投稿規定

▼稿件は別紙に認め、住所氏名を明記する(各題二十句以内)

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記する(各題二十句以内)

▼締切は厳守されたし。  
▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信封入のこゝ。

## 募 集

### 第四卷第一號課題

十一月十日締切 (各題二十句以内)

▼月 末 蛭子省 二選  
▼寝 顔 塚崎松 郎選  
▼縁 談 橋本二柳子 庄 万よし 共選

### 第四卷第二號課題

十二月十日締切 (各題二十句以内)

▼産 後 森 東魚選  
▼寫 眞 林田馬行選  
▼髮 結 岩崎柳路 喜田飯山 共選

### 每號募集

▼近作柳樽(三十句以内) 麻生路郎選  
▼各地柳壇(會展) 塚崎松郎編  
▼文章(評論研究吟行漫文)

### 社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

### 價 定

一部 參拾錢(郵)  
六部 壹圓六拾錢(郵)  
十二部 參圓(共)

### 廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十五年十月廿五日印刷  
大正十五年十一月一日發行  
第三卷第十一號 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生幸一郎  
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地  
發行所 川柳雜誌社  
振替大阪三一五一四番

## 川柳雜誌社事務所

大阪市港區八條通二丁目十一番地  
振替大阪七五〇五〇番

### 賣 捌 店

(大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂 金城堂  
(東京) 東一條 (京都) 三宅 (神戸) 米田 後藤  
(金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚 (廣島) 金星堂

蓄音機父は近頃宅で酔ふ

万よし

蓄音機唱歌になつて皆歌ひ

聞 治

漸くに蓄音機から節も出来

冷 笑

蓄音機かけてる方は肩をぬぎ

かほる

蓄音機まで金持の聲を出し

馬 行

いつも笑ふこゝで笑ふた蓄音機

屏三呂

姑と氣が合ふてゐる蓄音機

飯 山

待つによし待たるによし蓄音機

松 耶

蓄音機酒屋の段で妻を呼び

游二耶

蓄音機覺へる積り眼をつむり

山雨樓

# 日東長時間レコード發賣

本レコードの演奏時間は從來のレコードの二倍乃至四倍に相當致します

十二時レコードを演奏し得る蓄音機ならば如何なる機械にても演奏が出来ます  
本レコード演奏に必要な速度調節機は安價で取扱は至つて簡單でムいます  
端書又は電話にて御用命次第早速持參無料にて御取付致します



長時間レコード説明書及ビカタログ等御申越次第送呈

(速度調節機 一個六圓五十錢)

ツバメ印ニットレコード代理店  
純國産ツバメ號蓄音機發賣元

## 戎屋蓄音器店

大阪南區戎橋南  
電話南五四二番

